# 遅すぎた告白

YoShoki4869

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遅すぎた告白

【Ｎコード】
Ｎ１８７８Ｌ

【作者名】
ＹｏＳｈｏｋｉ４８６９

【あらすじ】
１０年前の第三次世界大戦の終戦後、様々な分野で日本は発展を遂げ、今もなおその勢いの止まる様子はない。
そんな２０５０年の春。高校一年生になった柚原優姫は、学校で一人の男子生徒に出会う。彼の名前は、相良悠一。
彼と親しくなっていく中で、優姫は徐々に彼の秘密を知る事になる…。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

この作品はフィクションです。実在の人物、団体、事件とは一切関係ありません。名前が出てきても現実とは全く違った設定ですのであしからず。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

この作品はバッドエンドです。ただ、グッドエンド版も書く予定です。途中までの流れはこの作品と全く同じなので、分岐になってから別々に書いていきます。とは言っても、相当あとまで（おそらく少なくとも３０話くらいまでは）展開が全く同じなので、バッドエンドが嫌いな方もどうぞ安心して読んでください。分岐した段階でお伝えします。タグも物語が展開するにつれて編集していく予定です。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

ジャンルをＳＦにしようかファンタジーにしようか迷ったんですが、どちらかと言うとファンタジーに近い気がするのでファンタジーにしました。もし「これはファンタジーじゃなくてＳＦだ」等の意見、もしくは注意などありましたらご報告下さい、すぐに変更致します。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

ブログ：ｈｔｔｐ：／／ｙｏｓｈｏｋｉ４８６９．ｂｌｏｇ１２．ｆｃ２．ｃｏｍ／
Ｔｗｉｔｔｅｒ：　Ｙｏｓｈｏｋｉ４８６９（あんまり呟く事ないですが…）
お気軽に訪問・フォローどうぞ～♪

## 第０１話　高校生活開始！（前書き）

初めましての方は初めまして。
途中で別のタイトルでグッドエンド版を出しますが、これを読み進めてしまったらバッドエンドです。ご注意ください。
途中までは普通の物語ですので、ご安心ください。
それではどうぞ、お楽しみください♪

# 第０１話　高校生活開始！

西暦２０５０年。全世界を巻き込んだ第3次世界大戦から１０年後。１００年前の戦争同様に戦争に敗れた日本は、１００年前と同様に元々優れていた技術をさらに向上させ、技術面では世界のトップに君臨した。

たった一時間の充電で２４時間走り続けることの出来る電気自動車、日本・アメリカ間を１２時間で往復できる民間ジェット機、掌に収まるほど超小型かつ超高性能なパソコン、通称「ＰＴＰＳＣ」（Ｐａｌｍ－Ｔｏｐ Ｐｅｒｓｏｎａｌ Ｓｕｐｅｒ Ｃｏｍｐｕｔｅｒ）の開発など移動技術や通信技術はもちろん、従来の何倍も効果がある抗癌剤（こうがんざい）の開発や臓器の機械化など、医療面でも世界に多大な影響を与えた。

そして、それは軍事技術も例外ではなかった…。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

そんな年の4月4日。紺色のブレザー、短めの黒いスカート、そして黒いオーバーニーソックスを身にまとった少女、というには少し成長しすぎている、しかし女性と呼ぶにはまだ若い女生徒二人が、すこし肌寒い坂道を駆け上がる。

「ミズキちゃ～ん、早く早く！ダッシュだよダッシュ！」

「そんなに急がなくても学校は逃げないわよ…」

「学校は逃げなくても時間は逃げちゃうでしょ～！あたし達の華々しい高校生活の時間がこうやってもたもたしてる内にもどんどんなくなってくんだよ！？」

少し前を行く黒いロングヘアーの女生徒の後姿を追いながら、ミズ

キと呼ばれた茶髪のポニーテールの女生徒は「まだ始まってすらいないのに無くなるわけないじゃない…」と心の中で呆れたツッコミを入れつつ、律儀に彼女に言葉を返す。

「別に高校生活って言っても中学と代わんないでしょ、役に立たない勉強して友達とダラダラ遊んで・・・」

「何を言ってるのかね、ワトソン君」

「誰がワトソンよ」

「高校と言えばモチロン…」

そう突っ込む瑞樹（みずき）を無視し、ロングヘアーの女生徒、柚原優姫（ゆずはら ゆうき）は振り向き、ウィンクと共に、

「恋愛でしょ♪」

さも当然のように言い放った。それを聞いた瑞樹は、「やれやれ…」と言わんばかりに肩をすくめ、一つ大きなため息をついた。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

「うわぁ～…大きい」

校舎を見上げる優姫がポツリと誰にともなく呟いた。それを自分に対する言葉だと解釈した瑞樹は自分も校舎を見上げ、首を捻る。

「そぉ？あたしは中学とあんま変わんないように見えるけど？」

「…もう、ミズキちゃんは…」

優姫が首を左右に振る。腰まで届く黒髪がその動作に合わせて左右に揺れる。

「何よ？どう思おうがあたしの勝手でしょ？」
「それはまぁ、そうかもしれないけどさ…。もうちょっとこう、何ていうか、雰囲気とか感動みたいな物があってもいいんじゃない？」
「疑問符をつけるな、あたしは知らん」
「むぅ、何か今日ミズキちゃんが冷たい…」
「ほら、バカなことやってないでとっとと教室見に行きましょ」

若干イライラした様子で瑞樹が掲示板を指差す。学校の初日だと言うのに、その周りに人は…存在しない。

「あれ、誰もいないね…」
「そりゃぁね…」

意識したわけではないのだが、声が自然とうんざりとした感じになってしまう。その理由である優姫は全く自覚のないのかそれに気づいていないが。
現在時刻、午前５時４８分。入学式開会約１時間４５分前。そんな早朝に優姫と瑞樹が学校にいるのには、勿論理由がある…ようでない。
単純な話だ。朝、高校生活が楽しみで楽しみで仕方が無かった優姫がまだ大絶賛爆睡中だった瑞樹をたたき起こし、家から引っ張り出して登校してきたのである。
そんな最悪な朝を過ごした上に昨日の夜更かしのせいで寝不足気味な瑞樹が上機嫌なわけがない。彼女の中の機嫌メーターなる物は限りなくマイナスに傾いている。

（何が悲しくてこんな朝っぱらから学校来なきゃなんないのかしら…）

聞いたところで、答えが返ってくるわけはない。そんな事はわかっていたが、聞かずにはいられなかった。

「え～っと、『柚原』、『柚原』…。あ、あった！１－２だって。ミズキちゃんは？」

「ちょっと待って…。あった、『天倉瑞樹（あまくら）』…うげっ、１－２…」

「やたっ！同じクラス！…『うげっ』って何」

「…別に」

そうは言ったものの、瑞樹は深いため息をついた。その様子を不審げに見ていた優姫だったが、やがて「ま、いっか」と呟き再び掲示板に目をやり、他の知り合いの名前を探し始めた。瑞樹は特にやる事もないので、その様子をじっと観察している。

しばらくして名前の捜索を終了し、「ふぅ…」と一息ついて瑞樹に向き直る。

「さて、と…。これからどうする？」

「あたしに聞くな！」

瑞樹が目尻を少し濡らして怒鳴った。

現在時刻は、ちょうど午前６時過ぎ。入学式まで、あと１時間。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

「校長先生いいこと言ってたね～！」

「相変わらず、あんたって変わってるわ…」

入学式を最初から最後まで、どこの学校の入学式でも名物の校長先生の催眠術さえも最後まで真面目に聞いていた優姫が興奮気味に瑞樹に話しかける。当然の如く入学式中の事は何一つ覚えていない瑞

樹は、朝の分の睡眠を幾分か取り返せた事により少しは機嫌も直っていたため、優姫の言葉に苦笑して答えるほどの余裕はできていた。二人はそのまま自分達の教室、１年２組に歩を進めた。席はとりあえず自由席だったため、優姫と瑞樹はもちろん、二人並んで座った。ごくごく普通なホームルーム、ごくごく普通な先生、そしてごくごく普通な流れで自己紹介へ。自己紹介の内容も「名前と趣味は必須、他は好きにしろ」というまぁ普通のものだった。
滞りなく自己紹介は進み、やがて優姫に順番が回ってきた。「…よしっ」と小さく気合を入れて、優姫スクッと立ち上がる。

「皆さん初めまして、柚原優姫です。１５歳で、誕生日は3月3日…だったと思います。趣味は…えと…ライトノベルとか漫画を読むこと、テレビゲーム、音楽鑑賞、それから走ること…かな？その中でも一番好きなのが音楽鑑賞です。え～っと、これから一年間、よろしくお願いします」

少しグダグダになってしまったため最後のお辞儀が少し慌しいものになってしまったが、とりあえずそれなりにスムーズにこなす事ができて安堵する優姫。その隣では、順番が回ってきた瑞樹が席を立つ。

「ど～も、天倉瑞樹です。趣味は家でゴロゴロする事です、以上」

妙に男らしい自己紹介を終えて瑞樹は席に着いた。すると案の定、優姫がツンツンッと肩をつついてきた。

（何よ？）
（ミズキちゃんダメだよあんな自己紹介じゃ！もっとちゃんとやらないと！）

まだ他の人が自己紹介をしている途中なので、声を潜めて会話をする。

（いいのよ、自己紹介なんて適当で。「シンプルイズベスト」って言うでしょ？）
（「シンプル」と「適当」は違うよ～！）
（うるさいわね～、あんたみたいに長くなってグダグダになるよりはマシよ）
（う〝…。い、痛いところを…）
（大体「誕生日は3月3日…だったと思います」って何よ？何「思います」って。忘れたの？）
（だ、だって色んな人の覚えてると自分の自然に忘れちゃうじゃない？）
（同意を求めないで、あたしはちゃんと自分の覚えてんだから）
（う～…。ミズキちゃんのイジワル）
（はいはい、どうせあたしはイジワルですよ。とりあえず今は黙ってなさい、一応授業中なんだから）
（は～い…）

渋々ながらも黙り、自己紹介に集中する優姫。その様子に満足してミズキも同じく自己紹介に注目する。すると、いつの間にかもう残った生徒は一人しかいなかった。

（ありゃりゃ、そんなに長い間話してたかな？聞いてなかった皆、ゴメンなさい…）

名も知らぬクラスメイト達に声に出さずに謝罪し、優姫は最後の一人を観察する。
その生徒は男子だった。スラリと背が高いが、細長いというイメージではない。通常（といっても何を基準にした「通常」なのかは分

からないが）よりほんの少し長めの艶やかな黒髪、整った顔立ち。少し吊り気味の目、キリリとしまった口。所謂「美青年」と言われるために必要な基本要素が基本的に揃っている青年だった。

「え～…初めまして、相良悠一（さがら ゆういち）です。趣味は音楽を聴く事。好きな音楽は特になし、自分が好きだと思ったら好き。これから一年間よろしくお願いします」

最後に軽く会釈して、悠一は席に着く。それとほぼ同時に先生が次に進み始めたので、悠一の事をボーっと見ていた優姫は慌てて前を向いた。

（相良君、か。音楽聞くの好きって言ってたし、後でちょっと声掛けてみよっかな～…）

そんな事をぼんやりと考えていたら、いつの間にか先生が重要な事を話し始めていたので、優姫はまた慌てて頭を振り、配布されたプリントに目を落とした。

結局、次に悠一の事を思い出したのは家の玄関で靴を脱いだ時だった。

## 第０１話　高校生活開始！（後書き）

いかがでしたでしょうか？少しでもお楽しみいただけたのなら幸いです♪

評価・感想など、お気軽にどうぞ。っていうかいただけたら文字通り飛んで喜びます。

現在かなり多忙なのでおそらく週末に一話ずつ更新する形になると思いますので、よろしくお願いします。

## 第０２話　早朝の談笑、真昼の喧騒（前書き）

ごめんなさい！前回更新した後、パソコンが天に召されまして、執筆が全く出来ませんでした…＜＞；
でも、そのおかげと言っては何ですが、今後のストーリーの展開は最後に更新した時より確かなものになりましたので、まぁある意味では良かった…ワケ無いですね、ゴメンなさい；

とにかく、新たなパソコンも手に入ったので、これからなるべく更新して行こうと思います！現在現地校が非常に大変かつ重要な時期なので、どの程度の速度で更新できるかは定かではありませんが、執筆できる状況だけは揃っているので不定期になるかもしれませんが更新はしていけると思います。

こんなダメな作者で申し訳ありません。それでも付き合っていただける方々には決して感謝の気持ちを忘れずにこれからも書いていこうと思うので、今後ともよろしくお願いします。

## 第０２話　早朝の談笑、真昼の喧騒

「もう、ミズキちゃんったら、ぐうたらなんだから…」

現在時刻、午前５時４５分。
当然の如く瑞樹はぐうたらでも何でもなく、ただ単純に優姫の朝が早すぎるだけなのである。
肌寒いを通り越して寒い坂道を歩いていると、道の先を制服姿の男子が歩いていくのが目に入った。

（…あれ？あれって、もしかして…）

彼の後姿には見覚えがあった。頭に浮かんだ名前を声に出す。

「相良君？」
「？」

道を行く生徒が振り向いた。それは優姫が想像したとおりの人物、相良悠一だった。

「やっぱり、相良君だ」
「…？」

優姫はパタパタと悠一に走り寄る。しかし、当の悠一はそんな優姫をポカンとした様子で見ている。

「…あ、もしかしてあたしの事忘れてる？」
「え～っと…ゴメン、ちょっと待った。思い出す」
「別にいいよ無理しなくても。あたしが勝手に相良君の事覚えてた

だけだし」
「いや、それは覚えてもらっといて失礼だから少しは努力する」
「だからいいって言ってるのに…」
悠一の頑固な様子に苦笑しつつも、優姫は黙って見守っている。
数分間頭を抱えたり唸ったりした後、悠一はポンッと手を打って、
「ユウキだ！」
「正解！ちなみに苗字は何でしょう？」
「…えっと…待て、思いだ―――」
「柚原。柚原優姫だよ」
「…思い出すって言ったろ」
「あたしは「別にいい」って言ったじゃん。下の名前思い出してくれただけでも十分だよ」
「…何か納得いかん…」
「気にしない気にしない。それで、相良君こんな時間に何やってるの？」
「特に何をしてるってワケじゃないんだけどな、まぁ散歩ってことにしとくか」
「散歩？何でこんな時間に？」
「そっちこそ」
「あたしはいつもこの時間に登校するから」
「…マジ？」
「？マジだけど」
「…校門開いてるのか？」
「多分」
「…まぁいいや。そんな事よりさ、『ユウキ』って珍しい名前だよな、女子にしては特に」
「あはは、よく言われる。まぁ読み方だけ聞けばね。でも漢字は『優しい姫』だから女の子っぽいでしょ？」

「優しい姫で優姫か。確かに、いい名前じゃん」
「そうかな？ありがとう」
悠一の言葉に、優姫は屈託の無い笑みを浮かべる。
「あ、そういえば悠一君さ、こないだ自己紹介で音楽が好きって言ってたよね？どんな音楽聴くの？」
「それも自己紹介ん時に言ったろ？クラシックでもＪポップでもジャズでもアニソンでも洋楽でもテクノでも…。まぁ要するに何でも。耳に馴染めばそれでよし」
「例えば？」
「だからホントに色々。何なら俺のアイポッド見せてやろうか？」
そう言って悠一はポケットからアイポッドを取り出すと、優姫にそれを差し出した。
「それじゃあちょっと失礼して…」
差し出されたアイポッドの電源を入れ、リストの一番上にあったプレイリストを開く。
そこに表示された曲はジャンルも言語もバラバラだった。プレイリストの一番初めの曲はパッヘルベルのカノン、次の曲は人気歌手のつい先日出たばかりの新作、そのさらに次は「ＶＯＣＡＬＯＩＤ」という音声合成ソフトを使った若干マイナーな楽曲、そしてそれに続いてスウィング・ジャズの代表曲の一つ、シング・シング・シング。そして下にスクロールしていくと、テクノユニット・パフュームの曲が2曲ばかりと、エトセトラエトセトラ。無法地帯である。ちなみに優姫が理解したのはプレイリストの中の全曲、３４曲中２１曲のみ。残りは聞いたことも無い歌手だったり洋楽だったり、知らない曲ばかりだった。

「…幅広いね」
「まぁ意識しないで気に入った曲入れてったらそんなモンだって。そういう、えっと、柚原、さん？はどういう曲聴くんだ？」
「呼び捨てでいいよ、あたしは悠一君ほど守備範囲広くないかな。最近人気の曲がほとんどだね」
「ふ～ん…。ちなみに今のお気に入りは？」
「う～ん…今ちょっとだけハマってるのはソーラン節かな」
「…へ～」

「最近の曲…？」という疑問は声には出さず、悠一はそれだけを口にした。

「…さてと、どうする？」
「何が？」
「これから。まだ学校まで時間あるじゃん。あたしはこのまま学校行こうと思ってたんだけどさ、せっかく会えたんだからどっかで適当に時間潰さない？」

優姫が時計を覗き込みながら尋ねる。確かに、今の問答で少しばかり時間は潰せたものの、学校が始まるまではまだ少し、と言うかかなり時間がある。

「時間潰すのは構わないぞ。別に用があって散歩してたわけじゃないし」
「じゃあさ、どっか寄って軽く朝ごはん食べてこうよ。例えば…マックとか」
「ん～…時間もあるし、財布の中身も充実してるし…そうだな、そうするか」
「じゃ、決まりだね♪レッツラゴ～！」

「あ、ちょ、おい柚原さん…じゃなくて、柚原！待てって！」
言い終わると同時に走り出した優姫の後を追って、悠一も駆け出した。

◆◇◆◇◆◇◆

「さ～てと…。今日も一日頑張りますかね…って、あれ？」
教室に入った瑞樹が最初に見たものは、座るはずの主人がいなくてポツンと寂しそうに置いてある友人の席の椅子だった。
続いて教室内を見回すが、目当ての人物は発見できない。
「…1時間半前に出発したのにあたしより遅いってどういうことよ？」
今朝わざわざ学校開始の1時間半前に家まで起こしに来た友人が未だに自分の席についていない事に疑問を抱きながらも、そろそろホームルームが始まる時間だったので着席する。約2分後、ホームルーム開始。そしていざ授業に突入せんとしたまさにその時。
「お、遅くなりましたぁ！」
優姫が肩を激しく上下させながら教室に入ってきた。
「ちょっと柚原、学校始まって2日目早々遅刻？」
「す、すみません…！ほら、相良君も早く！」
「別にんな急がなくたっていいだろうに…」
そんな事を呟きながら、悠一がハンバーガーを片手に登場した。

「…相良、いったいその手に持ってるのは何？」
「何って…見て分かりません？ハンバーガーです」
「いや、そうじゃなくて…」
「？…あぁ、えっと…普通のビッグマックですけど」
「だからそうじゃないって！何であんたは学校にハンバーガー持ってきてるの！」
「俺の昼飯です」
「何で今食べてるのよ！？」
「腹減ったからッス」
「…要するに早弁してたってこと？」
「そういう解釈も出来ない事もないかと」
「…あんた放課後職員室来なさい」
「了解」
「それから柚原！一人だけ逃げようとしない！」

悠一が怒られてる間に一人だけコソコソと席に着くつもりだった優姫が呼び止められた途端にその場で硬直する。

「あんたも放課後職員室に来る事！いい？」
「…はぁ～い…」

しょんぼりと肩を落とし、今度こそ席に着く。対する悠一は特に気にした様子もなく着席した。ちなみにハンバーガーは没収される前に完食した。

「…ちょっと優姫？何やってたのよ？」

肩を落として座っている友人に、瑞樹は声をかける。

「…マックで朝ごはん食べてた」
「うんそれは分かってるけど、あんた学校始まる1時間以上も前に家出たじゃない、何で遅刻なんてしてるのよ？」
「だって悠一君が…」
「こらそこ、喋るな！ホームルーム始めるぞ！」

先生の注意の声が教室内に響いたところで二人の会話が途切れる。
優姫が「また後でね」と小声で言った後で前を向いてしまったので、必然的に瑞樹も前を向くことになった。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

昼休み。

「さぁ、聞かせてもらうわよ」
「あ、ちょっと待ってて」

弁当を食べよう二人で着席し、いざ今朝の優姫の遅刻に理由について聞こうとしたその時、優姫ガ席を立ってクラスの後ろのほうへ歩いていく。
そして自分の席で一人で自分の弁当を広げていた悠一の前に立ち、言った。

「相良君、一緒に食べよ～」
「ん、いいのか？」
「ダメなら誘わないでしょ？」
「…ほんじゃ、お言葉に甘えて」
「よし。ほら、早く早く」
「ちょ、ちょっと待てって」

優姫の申し出に悠一は一度確認をし、了承を得てから返事をした。
一度広げた弁当を片付け瑞樹が待つ机に行くと、瑞樹が怪訝そうな顔をして待っていた。

「…なんであんたらそんなに仲いいの？」
「え、仲いいかな？」
「少なくとも昨日初めて会ったようには見えない」
「ん～、私はこれくらいが普通だと思ってるけど。それに仲いいのは別に悪い事じゃないでしょ？」
「そりゃまぁそうだけどさ…。って言うかさっきのあたしの質問に…」
「あ、相良君悪いけど私の机こっちの机に寄せてくっつけてくれる？」
「あいよ」

なにやら妙なチームワークでさくさくと弁当の準備をする二人を見て、瑞樹は何となく質問するタイミングを逃してしまった。
しばらくしてセットアップがすべて完了し、全員が席に着いてから瑞樹が改めて口を開いた。

「さて、準備も整ったところでそろそろ今朝の事教えてくれない？何で優姫は学校始まる一時間以上も前に家出てたのに、何で遅刻したわけ？」
「う…だ、だって…」
「だって？」
「悠一君が学校始まるギリギリの時間までマックでダラダラ食べてるんだもん…」
「…」
瑞樹が黙って悠一を見る。

「俺は別に遅刻したって気にしないし」
「普通は気にするの。って言うか気にしろ」
「別に良いじゃん」
「良くない！と言うかそもそもなんであんたはそんな時間に外にいたのよ？」
「朝早く目が覚めて暇だったから散歩」
「…変な奴」
「失敬な」
「至極当然の感想だと思うんだけど」
「失敬な」
「二度言うな」
「ま、まぁまぁ、二人ともケンカしないで…」
「何あんたは落ち着いてるのよ？あんたも巻き込まれてんのよ？」
「た、確かにそうだけどさ、職員室に呼ばれただけだし…」
「学校開始二日目から職員室に呼ばれるなんて聞いたことないわよ」
「う〝…」

優姫が反論できずに俯く。誰にも聞こえないような小声で「ミズキちゃんだってぐうたらのくせに…」と呟くのを忘れない。

「とにかくあんた。…えっと」
「相良悠一」
「そう、それ。今後は遅刻しないように。って言うかあんたは別にしてもいいけどその場合この子を巻き込むな」
「つっこみたい事が二つほど。名乗ったのに名前で呼ばないとはどういう了見だ。遅刻していいのか悪いのかハッキリしろ」
「あんたなんか『それ』で十分よ」
「…可愛くねぇな、ったく」
「そうよ、だってあたしは可愛い女の子じゃなくて綺麗な女なんだ

から」
「自分のことを『綺麗』言う奴は大抵の場合他人からその言葉を言われた事はないはず」
「お生憎様(あいにくさま)、今までで総勢５４人の男子から綺麗と言われ、内３３人から告白されました」
「そういう風にさり気なく自慢するところが綺麗じゃないところだよなぁ」
「そういうからにはさり気なく自慢しないあんたは当然告白されてるのよね？」
「当然、今までに８９人から告白された」
「嘘付き、その顔でそんなにモテるワケ無いじゃない」
「ははは、バレたか」
「どうしようもない馬鹿ね、バレるに決まってるじゃない。あっははは」
「え、えっと…二人とも？顔が笑ってないよ…？」

「「あっはははははははは！！！」」
「怖いから！二人とも怖いからやめて！」

## 第０２話　早朝の談笑、真昼の喧騒（後書き）

今のところはただの学園モノでしかありませんね。作品の紹介文に書いてあるような内容を求めている方々、徐々に説明文通りの作品になっていく（予定）なので、申し訳ありませんがもうしばらくお付き合いください。

## 第０３話　戦争（前書き）

気合入れて一週間以内更新です。この後宿題が…；；
今回長いです、６０００字強です。ちょっと２話に分けようかと思ったんですが、区切る良い場所が見つからなかったのと、それだと両方短めになってしまうという理由からくっつけちゃいました。
と言うわけでどうぞです。

# 第０３話　戦争

二人の生徒の不気味な高笑いが響いたその日の昼休みも終わり、午後の授業に入る。
二日目という事もあって、どのクラスでも授業らしい授業は行われなかった。学校終了まで残り一クラスとなった現在までにあった授業らしい授業と言えば、数学でやらされた去年の復習のプリントくらいか。
そんなユル～く過ぎる一日の最後、社会の授業。

「皆さん、『戦争』とは何だと思いますか？」

クラスに入り着席し、それを確認した教師が最初に口にした言葉がそれだった。
今まで通りダラダラしてるうちに授業が終わり開放されると思っていた生徒達は、その言葉を聞き理解するまでに少しの時間を要した。

「えっと…戦争とは国同士事故の目的を達成するために軍隊を率いて行う闘争状態、です」

ヒョロリとしていて丸眼鏡をかけた、いかにも「勉強は出来るがスポーツはまるでダメな優等生」なオーラを醸(かも)し出している生徒が、まるで辞書を丸暗記しているようにスラスラと教師の問いに答える。

「そう、その通りですね。しかしそれは世界における『戦争』の概念であって、君達の認識する『戦争』とは違うんじゃないですか？」

生徒全員が首をかしげ、頭の上に「？」を浮かべている。

「つまり、私は戦争の意味じゃなく、君達が『戦争』というものにどんな感想を抱いているかを聞いてみたいんです」

その説明を聞いて「あぁ、なるほど」という顔をしている生徒もいれば、未だに「？」を浮かべている生徒もいる。

「それではまず一つ例を。私は戦争は肯定すべきではない、積極的に回避するべき状態だと思っています。しかし、時と場合によってはやむをえない場合もあることも分かっているつもりです。だから、私は戦争を非難したりはしませんし、その時に戦ってくれた兵士の皆さんへの感謝も忘れません。もちろん戦争が起こらないのが一番良い事だとは思っていますが、どうしても避けられない場合、私は一刻も早く戦争を終わらせるために努力を惜しみません」

そこまでを真剣に話した先生は、一度「ほぅ…」と息を吐いてから、

「…というのが例えです。まぁこれは私が今まで生きてきて、戦争に対して抱いた感情ですから同意できないという方は大勢いると思いますし、それでも全然構いません。ただこんな感じに、自分の意見を皆に共有してくれればと思います。もちろん戦争が良いか悪いかを語っていただかなくても結構です、あなたが考える『戦争』を教えて欲しいだけですので」

少し微笑んで、今年５９歳になろうという教師は生徒達に告げた。その説明を聞いて、今度こそ生徒全員が教師の言わんとした事を理解した。

「…皆さん理解していただけたようですね。それでは主席番号順に名前を呼びますので、意見を聞かせてください。考えがまとまらない時はパスしてもらえれば、最後に回しますので言ってください」

そう断ってから、先生は出席名簿に視線を落とし、名前を呼び始める。出席番号順、それはつまり名前順という事で、約三人には誰が最初か大方の予想は出来ていた。本人を含め。

「…天倉さん、お願いします」

「えっと、ゴメンなさい、ちょっとまだ考えがまとまってないので後に回してください」

「分かりました。じゃあその次の…」

瑞樹が教師に申し訳なさそうに告げる。天倉瑞樹、今までの出席番号1番率、約９０％。

自分の苗字と隣に座る「ミズキちゃん相変わらず大変だね」などと抜かしている出席番号一番最後率約９０％の友人を恨みつつ、必死に自分の考えをまとめ始める。

その間に3人ほど進み、出席番号5番の相良悠一の順番が回ってくる。

「すいません、俺もちょっと後回しでお願いします」

「えぇ、分かりました。それじゃあ天倉さんの後にお願いします」

それを聞いて、悠一は「うげっ」と顔を顰(しか)めつつ、瑞樹の席を見る。その顔を見た瑞樹は、親指を下に突き出した。隣の友人は手を顔に当てて頭を横に振り、二人の仲を悲観していた。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

「え～、柚原さんで最後ですね。お願いします」

「あ、はい」

とうとう名前を呼ばれ、席を少々気合を入れて優姫が立ち上がる。

「えっと、私は戦争にはどうしても賛成できません。相手が仕掛けてきた場合だって話し合う事は出来ると思いますし、こっちから仕掛けるなんて論外だと思います。だって戦争をした結果って絶対に話し合いでも決定できる事じゃないですか、それをわざわざ人の命なんていうすごく大切なものまで奪われるようなやり方でやるなんて馬鹿げてる、というのが私の考えです」

「なるほど」

今までの生徒が全員曖昧(あいまい)な意見しか言ってこなかったのに対し、ここまでハッキリと自分の意見を言ったのは優姫が初めてだった。その様子を見て、教師が満足そうに頷く。

「それじゃあ、残りは先ほどパスをした二人ですね。まずは天倉さん、考えはまとまりましたか？」

「はい、ご迷惑おかけしました」

「いえいえ、それではお願いします」

「私は、色々考えてみたんですが、良い悪いでは決められませんでした」

教室の後ろのほうでボソッと「まとまってねーじゃん」と言う声が聞こえてきたので、片手を後ろに回して再び親指を下に突き出す。

「そりゃ戦争のせいで死人がたくさん出たり国がメチャメチャになったりして、一見悪いようにしか見えないんですが、でも三次大戦の時の日本みたいにそこから頑張って、新しい発明をして、私達の暮らしが楽になってるじゃないですか。そう考えると戦争って本当に悪いことばっかりなのかなぁって。まぁ多分当時の人間からしたら良い事なんて何一つなかったと思うんですけど、時間差でこうし

て良い事が起こってるわけですから、簡単に『戦争は悪い』って言うのもなんか違う気がして…えっと…終わり、です」
「分かりました、ありがとうございました」

自分の役目を終えて、瑞樹が自分の席につく。

「さて、では最後、相良君お願いします」
「はい」

最後の一人、悠一が席を立つ。さすがに最後の一人ともなれば注目を浴びてしまい、現在クラスの9割の視線が悠一に集中している（内1割は惰眠を貪っている）。その中には当然、何となく期待のような感情を読み取れない事もないような表情の優姫と、馬鹿にする気満々の瑞樹の視線もあった。
そんな何とも居心地の悪い空間の中、悠一はゆっくりと自分の言葉を紡ぐ。

「俺の『戦争』への考えは、一言で言えば『無罪』」

教室が、静まり返った。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

「優姫～、早くしないと置いてくわよ～」
「ちょ、ちょっと待ってって！」

放課後。
とっとと帰りの準備を済まして教室のドアで待っている瑞樹の催促に焦りながらも、テキパキと荷物をまとめていく。そして全部まとまってから、

「相良君〜」

同じく帰り支度をしている教室の一番後方にいる悠一に声をかける。

「ん？何か用か？」
「うん、一緒に帰ろ？」
「誰と誰が？」
「相良君とミズキちゃんと私が」
「…瑞樹もか？」
「そんな嫌そうな顔しないの！」
「…まぁいっか、分かった」
「やたっ！じゃ、早く来てね！」

了解、と適当に答えて支度を再開する。ふと声が聞こえてドアのほうを見ると、瑞樹が優姫の肩を鷲掴みにしてガクガクと揺らしている。時折、「何であんな奴――――！」「あたしに確認――――するな！」等の怒声が聞こえてくる。
「…無事で済むんだろうか？」と呟いてから、覚悟を決めて二人の下へ向かう。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

天倉宅。

「じゃ、じゃあミズキちゃん、また明日ね〜！」
「はぁ、こんな奴に家の場所を知られるなんて…。きっと明日からストーキングミッションを開始するつもりだわ…」
「俺はどこの蛇だ、って言うかそれを言うならスニーキングミッションだろ」

「誰もゲームの話しなんてしてないわよ、このゲームオタク」
「それを理解出来るお前も十分オタクなんじゃないのか？」
「あ～、はいはい！分かったからもう行こ！じゃあね、ミズキちゃん！」
「あ、おい、まだケンカ…話は終わってな――――」
「はいはい、分かったから！」

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

「ったく、瑞樹のヤロー…」
「女の子だけどね」

ブツブツ愚痴を言い続ける悠一の態度に苦笑しながら優姫が答える。

「でも嫌いにならないであげてね？ミズキちゃん相良君の事気に入ってるから」
「あの態度をどう解釈したらそう見えるのか説明を願う」
「だってミズキちゃん嫌いな子はずっとひたすら無視し続けるもん」
「…結局どっちも嫌われてるだけなんじゃ？」
「不器用なだけだよ。ホントに嫌ってるわけじゃないから安心して」
「何だかなぁ…」
「大丈夫、あたしが保障するから」
「うわぁ、頼りねぇ」
「あぁっ、酷い！それ酷いって！」
「冗談だよ、冗談。サンキュ」
「今度言ったら本気で怒るよ？」
「たいした事なさそうだけどな」
「さ・が・ら・く～ん？ケンカ売ってるのかな！？」
「いいや、からかって楽しんでるだけ」
「もうっ！」

優姫が隣を歩く悠一の腕をバシッっと叩く。「あたっ」っと全然痛そうに見えない様子で笑いながら少し逃げる悠一。

「叩く事ないだろ？」
「相良君が悪い」
「からかってるだけじゃん」
「叩かれるのが嫌ならからかわなければいいでしょ？」
「それは無理、お前の反応面白いんからやめらんない」
「じゃあ素直に叩かれる！」

優姫がもう一度手を振る。しかし今度はそれを避けた悠一が皮肉たっぷりに笑う。

「〜っ！もうこの話おしまい！」
「なんだ、つまらん」

悠一が優姫の隣に戻り、今まで通りに並んで歩く。しかし会話は途切れてしまい、しばしの沈黙が訪れた。何とかその沈黙を破ろうと脳内を散策しているうちに、元々聞こうと思っていたことがあったのを思い出した。

「…そういえばさ」
「ん？」
「…『無罪』って、何？」
「無罪？何が？」
「さっきの授業の時だよ。戦争は無実だって、相良君言ったでしょ？」
「あぁ、あの話か」

そう、さっきの授業の終わり、最後の一人になった悠一の口から発せられた一言はその場にいた誰もが予想だにしていなかった回答で、誰も何の反応も示す事ができなかった。そんな状況で話し続けてもいいのかどうか悠一が迷っているうちにベルが鳴り、授業が終わってしまった。だからその場にいた誰一人として、悠一の言う「無罪」の意味を理解していないのだった。

「戦争ってさ、何の意味もなく人の命がなくなってっちゃうんだよ？それなのに相良君は誰にも罪がないって言うの？」
「そんな事言ってないだろ。実際俺は戦争始めた国が悪いと思うし」
「…ゴメン、分かるように説明してくれない？」
「そうだな…。例えばさ――――」

悠一は右手の小指と薬指をたたみ、突き出した人差し指と中指をくっつけ、親指を立たせ――――要するに手で拳銃の形を作り――――

「っ！？」

――――優姫の頭に突きつけた。

「俺がお前をこの場で殺したとする」
「な…えっ…！？」

あまりにも突然すぎる出来事に、優姫は戸惑いを隠せず言葉を発する事ができない。
もちろんそれがただの手で殺される事なんてあり得ないと分かってはいたが、それでも妙な恐怖に当てられ、頭が混乱していた。

「例えばだ、例えば。別にホントにお前の事を殺したりしないって。で、もし俺が急に鞄から獣を取り出してそんな血迷った事をしたと

したら、俺はどうなる？」
「…け、警察に捕まるとか？」
「ま、未成年だからどうなるか詳しくは分からんけど、とにかく何らかの罰があるよな。じゃあ今度は、今が戦争中で、ここが戦場で、お前が日本兵、俺が外国兵だったらどうだ？」
「ど、どうって…？」
「戦争中に戦場で兵士が相手兵士を撃ったら、そいつは罪に問われるか？」
「…ぁ！」
「問われないだろ？戦争で人を殺すなんて『当たり前』、だから罪に問われるわけがない」

戦争という状況下では、通常最も犯してはいけない罪は、至極当然の行為でしかない。
すなわち、無罪。

「…そういうこと、か」
「そういうこと。理解したか？」
「理解はしたけど…」
「したけど？」
「…納得は出来ないかな」
「…」
「いくら戦争でも、人を殺すのが『当たり前』なんて、そんなの納得できるワケ無いじゃない」
「…優しすぎるな、柚原は」
「む～、また馬鹿にしてない！？」

その言葉に少しからかいを感じたのか、優姫がさっきまでの調子で食って掛かる。

「馬鹿にはしてないけど、面白いとは思ってるかも」
「面白いって何よ～、あたしはあたしの意見を言ってるだけなのに～！」
「…相変わらず表情がコロコロ変わる奴だな。やっぱ面白いわお前」
「全然褒められてる気がしない～！」

優姫がいつもの調子に戻ったのを期に、図らずとも少し重苦しくなってしまった空気を、二人が意識して明るく振舞い、修正した。

「あ、私左だけど。相良君は？」
「俺は…左」
「そっか、じゃあもうちょっと一緒だね」
「…」
「…ちょっと、そこはもうちょっと嬉しそうにするとかさ、何かリアクションしようよ？」
「ウワー、ウレシイナー」
「全然感情がこもってな～い！」
「ソンナコトナイデスヨ？」
「…まぁいいや、どうせ――――」

からかいながら心の底から面白そうに笑う悠一と、からかわれながらもなんだかんだで楽しそうな優姫が二人揃ってY字路を左に曲がりすぐのところで立ち止まる。

「――――私の家ここだしね」

優姫が立ち止まったのは、Yの字の左の付け根辺りにある家だった。その家の表札には、確かに「柚原」と書いてあった。

「近っ！…まいっか、じゃあまた明日学校でな。そいじゃな～」

「あ、ちょっと待って！」

悠一がとっとと言ってしまおうとするのを、優姫が静止する。

「ん？」

「その、明日もさ、一緒に学校行かない？」

「…それは何か？明日も5時半に起きろと？」

「…ダ、ダメ？」

「…あまりしたくはない」

「じゃ、じゃあさ、7時！7時にあそこのY字路のところで待ち合わせしよ！？それなら良いでしょ？」

「ん、それなら問題ないぞ。明日の7時にY字路だな？」

「うん。忘れないでよ？」

「最善を尽くす。ほいじゃな」

「うん、また明日」

今度こそ先に進もうとする悠一と分かれて、家の中に入る。急いで靴を脱いで、「ただいまー！」と叫び挨拶を済ませ、ドタドタと階段を駆け上がり、自分の部屋に飛び込んで窓を開ける。

「相良く…あれ？」

悠一が帰ったはずの道には、既に人影一つ存在していなかった。怪訝に思いながらも「急いで帰った」と結論付けて窓を閉めようと首を引っ込めたその時———

「あ…」

Y字路の向こう側に歩いていく悠一の姿が、視界の隅に飛び込んできた。

「…何で？だって、相良君もこっちだって言って…」

そこで思い出した。優姫が左といった時、悠一は「俺も」じゃなく「俺は」と言った。悠一も左なら、「は」ではなく「も」というのではないか？

「…送ってくれたのかな？」

窓を閉めつつ、その視線は悠一が消えたYの字の反対側の道路を捉えて逃がさなかった。

## 第０３話　戦争（後書き）

今回、結構ルビを使ってみたんですが、どうでしたか？
もし少し読みにくいようでしたら今後はなるべく減らすようにしようと思うので、ご意見ありましたら感想のところにお願いします。

## 第０４話　日常の裏の非日常（前書き）

ゴメンなさい、ものっそい遅れました；；
この間引越しが決まってその準備のため色々バタバタしておりまして、しばらく更新が遅れそうです。少なくとも１１月の始めまではあまり執筆する時間が取れないかもしれないので、申し訳ありませんが次の更新は早くても２週間後になりそうです。

## 第０４話　日常の裏の非日常

「…」

水曜日、午前６時５５分。
道路の先に、ボォ～っと突っ立っている女子高生を発見した相良悠一は、一つため息をつくと彼女に近づいた。

「よぉ」
「あ、相良君おはよ～！」

に気づいた彼女、柚原優姫は悠一の下にトテテッと軽快なステップで近寄ってくる。

「ちゃんと約束覚えてたんだね、ちょっと意外かも」
「また失礼な事を言いおって」
「だって相良君全然真面目に見えないし」
「不真面目な奴が真面目に見えるワケ無いだろ」
「うん、だから約束も忘れちゃうかなって」
「不真面目なのと約束破るのは関係ないだろうが。大体お前は人のこと言えるのか？」
「え？」
「お前何時からここにいた？」

悠一のその問いに、優姫は露骨にギクッという顔をする。

「な、何のことかな？はははは…」
「図星か」
「しょ、証拠は！？」

「その発言そのものが証拠のような気もするんだけど…」
「そ、そんなの証拠じゃないもん！」
「いや、証拠といわれてもほとんど勘だし」
「詐欺だ～！相良君が私を騙した～！」
「そっちが勝手に色々喋ってるだけだろ」
「２時間も待たせた上ににこの仕打ちは酷くない！？」
「俺はお前が指定した時間の通りに来ただけだ、って言うかお前やっぱりそんな時間から待ってたのか…」
「トイレに行きたいのも我慢してたのに～！」
「朝家を出る前に済ませとけ！って言うか行ってこい今すぐ！そんでもってそんな事を男の前で暴露すんな！」

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

――――数分後。

「うぅ…『おしとやかで可憐で賢い、才色兼備な美少女優等生』なイメージが粉々にぃ…」
「誰の？」
「あたしの」
「それなら心配すんな」
「壊れてないの？」
「元々そんなイメージはない」
「そんなぁ！？」

トイレから戻ってきた優姫と悠一は通学路を並んで歩いていた。

「少しくらいあったでしょ？」
「むしろ俺の中で『美少女』の部分以外は全部逆だ」
「…じゃあどういうイメージ？」

「『無駄に明るくて面白い勉強も運動も出来なさそうな美少女なバカ』ってとこか？」
「全然逆じゃん！」
「だからそう言ってんじゃん」
「そもそも『美少女』が名詞じゃなくて『バカ』が名詞の印象ってどうなの！？」
「バカのくせにちょっと知的な突っ込みすんな」
「バカバカ言うな～！」
「ほら、とっとと行くぞバカ。遅刻する」
「だからバカじゃないって言ってるでしょ！」

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

「おはよ～！」
「…」
「…あ、あの、ミズキちゃん？」
「…あたしの言いたい事分かる？」
「…えと…いつもより遅い？」
「違う！」

優姫の頓珍漢（とんちんかん）な答えに対し、瑞樹は優姫の頭に手刀（しゅとう）喰らわせた。

「痛ぁ！な、何でぇ！？」
「何でこいつを連れてくるの！？」
「だ、だって友達だし…」
「あたしの友達じゃないでしょ！行きたいならあんたとこいつ二人だけで行け！」
「だ、ダメだよそんなの！ミズキちゃんだって友達なんだから！」
「…あぁもうダメだ、キリが無いわ…」
「おい柚原、そろそろ行かないと遅れるぞ」

少し離れたところから悠一が優姫を急かす。

「あ、うん！ほら、ミズキちゃんも早く行こ！」

「…はぁ、もう何を言っても無駄って感じね」

走って悠一の後を追う優姫に続き、瑞樹も観念して重い重い一歩を踏み出した。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

「去年までの復習と、皆の実力を知ると言う意味で、今から小テストをします♪」

新しいメンバーでの登校が出来た事に上機嫌だった優姫のテンションを一気に落としたのは、２限目の担当教師のこの一言だった。

もちろんクラスの何割かは口々に不満を漏らしたり頭を抱えたりしているが、優姫だけは何やら目が虚ろでボーっとしている。

「終わったらすぐに採点するから私に渡してね。それじゃあ…はい、始め」

配りながら説明を終え、開始の合図をした瞬間に生徒全員が用紙を裏返しシャーペンを動かし始める。

そして、２限目が終了し悠一の机に優姫と瑞樹が集まった。

「よ、二人ともどうだった？」

「あたし９４点。優姫は…」

「…ご、５２、点…」

「低っ…」

「う、うるさいうるさい！そういう相良君はどうだったのさ！？」
「ん」
悠一が優姫に突きつけたテスト用紙には、赤いペンで見事な「１００」が書いてあった。
「…１００…」
「うっわ最悪、こいつに負けた…」
「うはは、ざまぁみろ」
「ふん、どうせカンニングでもしたんでしょ」
「…１００…」
「負け惜しみは見苦しいぞ」
「うっさい、とっとと着替えに行くわよ。次体育なんだから」
「へいへい」
「…１００…」
「ほら優姫、いつまでも放心してないでとっとと行くわよ」
そんな優姫を見て、やっぱりバカだったか、と納得する悠一なのだった。
◆◇◆◇◆◇◆
体育。
「今日は全員１００メートル走のタイム計るぞ、生徒番号順に並べ～」
担任の指示に従い、生徒達がぞろぞろとトラック上に並ぶ。
☆天倉瑞樹、１３秒４２。

「おぉ、なかなかいいタイムじゃないか。陸上部来ないか？」
「ふぅ…。ど～も、考えときます」
「やるじゃねーか」
「まぁね。あんたもせいぜい頑張んなさい」

☆柚原優姫、１６秒５２。

「…頑張れよ」
「はぁ、はぁ…。は、はい…」
「…お前ホントに全然ダメじゃん」
「う、うるさい、なぁ…。しょうがない、じゃん、出来ないん、だから…」

★相良悠一、１２秒１０。

『速ええええぇぇ！！』
「すごい！相良君すごい！」
「そうか？こんなもんだろ？」
「相良、お前陸上部に来る気はないか？」
「お断りします、めんどくさいんで。っていうか今は勧誘するより授業進めてください」
「…納得いかないわ」
「よう、せいぜい頑張ってみたぜ」
「…あんたってホントにムカつくわ…」

そんなこんなで全員タイムを測定し終え、グラウンドを3週してその日の授業は終了した。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

その日の昼休み。

「相良〜！」

「ん？」

声のした方を見ると、声の主は現在クラスで悠一、続いて二番目くらいに注目されている男子生徒だった。２限目のテストで９２点、体育の１００メートル走で１３秒８１を記録している。そんな彼が、物凄い爽やかな笑顔を浮かべながら悠一に歩み寄った。

「お前スゲーな、ちょっと話したいから一緒に食堂行かね？」

「ん〜、そうだな…」

そう聞かれ、悠一はチラリと優姫の方を見る。

その視線に気付いた優姫は小さく笑い、手を振った。「行ってきて良いよ」と言う意味だろう。

「いいぞ、じゃあ行くか」

「おう」

二人は揃って教室を出た。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

「相良君、もうクラスの人気者だね」

「…ねぇ、あいつのどこが良いわけ？」

「へ？何が？」

「悠一よ、悠一。そりゃ確かに顔もまぁまぁ良いし頭も良いし運動神経も良いわよ、ムカつくことに。でも性格最悪じゃない。何であ

いつに構うのよ？」
「ん～、まぁ確かに意地悪だね、相良君。でもさ、一緒にいて楽しいでしょ？それに多分相良君ホントはすごく優しいと思うよ？」
「何を根拠に？」
「や、別に根拠なんて無いんだけどさ。なんとなくかな」
「…あんたの勘はバカにできないからね。ま、それはともかく、悠一の奴大丈夫かしらね？」
「？」
「さっき悠一と一緒に出てった奴、あんまりいい噂は聞かないわよ？」

◆◇◆◇◆◇◆

「…なんで校舎裏？」

悠一は周囲を見渡し、次に自分をここまで連れてきた男子生徒の方を見た。男子生徒の顔にはさっきまでの笑顔は無く、無表情だった。

「話がしたいって言ったろ？」
「言ってたな、ついでに『食堂行かね？』とも言ってたな」
「アレは嘘だよ、嘘」
「なるほど。で、用件は？」
「俺さ、中学では勉強の成績も体育の成績もトップだったんだよ」
「ほう、優等生という奴だな。もっと成績いい奴なんていくらでも良そうなもんだが」
「まぁな、少しだけ俺よりも優秀な奴がいてな、だから全員脅してわざと成績落とさせたんだよ。おかげで中学ではモテモテでさ、結構遊んでたんだよ」
「ふむふむ、随分と悪いことしてきたんだな。じゃ、俺はこれで」

悠一はヘラヘラ笑いながら踵を返す。その肩を男子生徒が掴んだ。

「逃げんなよ、まだ話は終わってないんだからよ」

目だけで後ろを振り返ると、苛立ちと憎しみに顔を歪めた男子生徒の顔が窺(うかが)えた。

「要するによ、お前にも同じ事をしろって言ってんの。簡単だろ？わざとちょっとだけ学校で手を抜けばいいだけだ。そうするだけで痛い目を見ないで済むんだからよ」

「…」

悠一は無言で視線を前に戻し、肩に置かれた手を反対側の手で払い除けて校舎へ戻ろうと足を進めた。

「…そうかよ」

背後から男子生徒の声が聞こえた。

「だったら…」

地面を蹴る音。

「ちょっと痛い目見てもらうしかねぇよな！」

後頭部に衝撃。続いて誰かが横を走り抜ける音、そして正面で立ち止まった気配。

男子生徒の拳をモロに喰らってしまった悠一の体は、衝撃を少しでも逃そうと自然と前のめりになる。

「…分かったな、もしまた俺よりいい成績取りやがったら、次はもっと痛い目見ることになるぜ？それが嫌だったら――――」

一方、男子生徒は勝利を確信して振り返り確認することもせず淡々と言葉を紡ぐ。

だが…

「っ！？」

背後から髪を引っ張られ、背中から地面に倒れこむ。肺から空気が強制的に排出される。

「カ…ハッ…！」

「ってぇな、いきなり殴りかかる奴があるかよ」

髪を引っ張った主、悠一は言葉のわりに大して痛がった様子も見せず、地面に横たわる男子生徒を見下ろしていた。

「ゲホッ、ゲホッ…！て、てめぇ…！覚悟はできてんだろ――――」

「あぁ？」

まだ反論しようとする男子生徒の態度を見て、悠一は苛立ちを含んだ目で男子生徒を睨み、腹部を踏みつけた。

「ガハッ…！！」

「こっちの台詞だ。覚悟があって俺を脅そうとしたんだろうな、あぁ？」

「グッ…、ゲホッ、ゴホッ！」

腹部を踏みつける足に徐々に力を加えながら、悠一は続ける。

「てめぇみたいなのに脅されてもな、1ミリたりとも怖かねぇんだよ。しかも脅しの内容が『私のために成績をわざと落としてくれませんか』だぁ？っざけてんじゃねぇぞ、おい」

男子生徒の目に涙が浮かぶ。腹部から足をどけた。

「二度と俺に声を掛けるな、目も合わせるな。そうすればこれ以上痛い目見ないで済むかもな」

「わ、分かったから、ゆ、許し――――ガッ！」

「声を掛けるなって言ってんだろうが」

男子生徒は丸まりながらコクコクと首を縦に振った。悠一はそれを見て大きな舌打ちをして、踵を返して校舎に引き返した。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

「あ、相良君、お帰り！」

「ん」

教室に戻るなり、自分の机で弁当箱を広げていた優姫が声を掛けてきた。

「何だ、もう戻ってきたの？」

「悪かったな」

「どうせならこのままあたしの前から消えてしまえばよかったのに」

「そりゃ残念だったな」

いつものやり取りを交わしつつ、適当な席から椅子を引っ張ってきて座る。

「それで、何の話だったの？」
「ん？何が？」
「さっきの子。話があるっていってたじゃない」
「あぁ、俺と付き合ってくれって」

それを聞いた瞬間、優姫が口に含んでいた卵焼きを盛大に悠一の弁当に吹き出した。

「あ〝あ〝あ〝ぁ〝ぁ〝ぁ〝！！！何しやがるお前！」
「嘘っ！？嘘でしょ！？」
「んなことよりどうしてくれる！俺の弁当が台無しじゃねぇか！」
「あははは！ざまぁ無いわね！」

そんな、優姫達にとっては何の変哲も無い昼休みだった。

## 第０４話　日常の裏の非日常（後書き）

なかなか自分が表現したいように表現って出来ないもんですね；
校舎裏のシーンでそれを痛感しました、精進します。

それから、作者は日本の学校に一切通ったことが無いので、もしかしたらおかしな場面があるかもしれません。ご了承ください。

## 第０５話　雅樹こと「田中太郎」（前書き）

前の更新から…どれくらい経ちましたっけ？…；

申し訳ありません、引越し後のインターネット環境が整わなかったりテスト三昧で忙しかったりとチャンスがなくてなかなか更新できませんでした…。

これからまだちょこちょこテストがあったりするのですが、すこしずつペースを上げて行けたらなぁと思いますので、もしよろしければこれからも気長にお付き合いいただければ幸いです。

## 第０５話　雅樹こと「田中太郎」

「相良君、おはよ」
「ん。そんじゃ行くか」
「うん」

例の事件から2週間後。悠一と優姫はいつもの場所で合流した。

「ねぇ、今日お昼食堂で食べるでいい？」
「何でだよ、今日も普通に弁当持ってきてるけど」
「だってあたし今日お弁当無いんだもん、お母さんが泊りがけで仕事してて作れなかったの」
「ん～、まぁ俺は別にどこでもいいから瑞樹がいいならいいんじゃねぇの？」
「やたっ！むふふ～、高校で学食食べた事ないから何気に楽しみにしてるんだよね～♪」
「それが本音か…」

その後、瑞樹の了承も得て食堂で昼休みを過ごす事が決定した。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

そんなわけで食堂。
弁当を持ってきた悠一と瑞樹は席を探し、弁当の無い優姫が食事を買ってくるのを待つ。
やがて優姫が蕎麦を買ってきて、三人でテーブルを囲って食べ始める。

「あ、そういえばさ、前に相良君に告白した男の子最近学校来てな

いね」
「あぁ、アイツならもう随分前に転向したわよ」
「え、何で！？って言うかミズキちゃん何で知ってるの！？」
「あんた以外全員知ってるっての、こないだ沙恵ちゃんが言ってたじゃん」

ちなみに「沙恵ちゃん」とは悠一たちのクラスの担任の沙恵理先生のあだ名である。
教師暦2年の新人教師で、美人の上に気さくな性格をしているので生徒から非常に人気のある教師だ。

「え～嘘だ、あたし聞いてないもん」
「聞いてないだろうな、お前寝てたし」
「…教えてくれても良かったのに」
「自業自得だろ」
「…じゃあ起こしてくれても良かったのに」
「起こしたところであんたが起きるわけないでしょ」
「…って言うかこういう時だけ仲良くなるのやめてよ」
「「こいつと仲が良いとかありえないから」」
「…やっぱ仲良いじゃん」

そんなこんなで食事が終了し、教室へと通じる廊下を歩きだす。

「って言うかあの子名前なんて言うんだっけ？」
「…あいつ可哀想に、名前すら覚えてもらってないのね」
「まぁ接点なかったしな。確か…田中太郎」
「…んなワケ無いでしょ…って、あれ？」
「あれ、何だ結局誰も覚えてないじゃん！？」
「お、覚えてないんじゃなくて思い出す必要がないだけ！」
「『思い出す』って言ってる時点で忘れたって自白してない？」

「う〝…まさか優姫にツッコまれる日が来るなんて…」
「それ軽く傷つくよ？」
「そうだよな～、思い出す必要ないだけだもんな～」
「オイコラそこ！ニヤニヤすんな！」
「ミズキちゃん、言葉遣い言葉遣い」
「…プッ！」
「殺す！」
「ミズキちゃん！暴れないで、目立つから！」
「そうそう、人目の多い廊下で女が『殺す』とか大声で言うもんじゃないぞ？せめて小声で言え、小声で」
「…っ！」

悠一の冷静なツッコミを受けて少し慌てた様子で辺りを見渡す。自分が注目されているのに気づき、少し頬を紅くして俯いてしまう。

「…殺す」
「…素直でよろしい」

かすかに聞き取れたその一言には、さっきの軽く3倍ほどの殺意が込められていた。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

その後。
午後の授業は滞りなく終了し、帰りのホームルーム。

「さ～て、じゃあ今日はここまで。委員長、パパッと号令しちゃって」

沙恵理が呼ぶと同時に、委員長が号令をする。

「起立。れ…」
「あ、ゴメンちょっと待って一つ忘れてた！相良」
「ハイ？」
「あとで職員室来て。じゃあ委員長、続けて」
「…起立。礼」

礼が終わると同時に沙恵理が教室を出る。それがスイッチだったかのように教室が喧騒に包まれた。

「あんたなんかしたの？」
「むぅ、やっぱ沙恵ちゃんの机にゴキブリのおもちゃは強烈過ぎたか…」
「何その悪質なイジメ…」
「冗談だ。何のことやらさっぱり見当もつかん。長くなるかもしれないから先帰っていいぞ」
「マジッ！？やっほー！」
「そこまで心の底から喜ばれると超ムカツク」
「い、良いから早く行ってきなって！」
「チッ…。じゃ、また明日な」
「二度と帰ってくるな～」
「も～、ミズキちゃん…相良君、また明日ね～」

挨拶を済ませると、悠一は手っ取り早く帰り支度をして教室を出て行った。

◆◇◆◇◆◇◆

「ふぅ…」

一つ大きなため息をついて、雄一が校舎を出る。日は既に傾き、空は真紅に染まっている。

「…さて、帰るか」

「あ、相良君おかえり」

「んぁ？」

校門を出たところで不意に声をかけられ立ち止まる。振り返ると、そこにいたのは先ほど分かれたはずだった柚原優姫だった。

「何でお前いるんだ？遅くなるかもしれないから帰れって行ったろ？」

「いやぁ、さっきまでそこのコンビニで立ち読みしてたんだけど気づいたら結構遅くなっちゃって、相良君いるかどうか気になったから来て、まだいるみたいだったから待ってたの」

「俺がまだいるって何で分かったんだよ」

「え？そ、それは…靴箱に靴がまだ入ってたから」

「…どのくらい待ってた？」

「え～っと…5分くらい？」

「…」

悠一は少しの間黙り込み、小さなため息をついて優姫に歩み寄って素早く手を掴む。

「えっ…！？」

「んな都合よく行くワケ無いだろうが、見え見えのうそついてんじゃねぇっての。手がめちゃくちゃ冷たいぞ、軽く30分は待ってたろ」

「さ、相良君の手も結構冷たいよ？」

「俺は生まれつきそうなんだよ。それとも何か、お前も元々手冷た

いのか？」
「そ、それは…。」
「ったく、そんなに呼び出しの内容が気になるんなら電話でも何でもいいだろうが。風邪ひ…きはしないだろうけど、寒かったろ？」
いくら春とはいえ日も落ちているこの時間はかなり冷える。現に今も通行人は厚手のコートやジャケットを着ていたりマフラーをしていたりする。

「わ、私だって風邪くらいひくよ！」
「だったらなおさらだバカ、寒い中何やってんだか…」
「…ご、ごめんなさい。…で、先生なんだって？」
「雅樹の奴が転校した理由聞かれた」
「マサキって？」
「2週間前に俺にアタックしてきた男子生徒」
「あぁ、あの子マサキって名前だったんだ…って言うかなんでその子が転校した事について相良君が聞かれるの？」
「あっちの母親から学校に電話があったらしい、『うちの子が転校したいって言いだしたのは相良って生徒のせい』ってな」
「え、そうなの！？」
「多分」
「さ、相良君何したの！？」

―まさか暴力！？それとも逆転の発想で…男の子同士で禁断の…！？という感じで妄想全開の優姫を特に気にした様子もなく、悠一は平然と答える。

「あいつの告白を断った」
「…へ？」
「いやだから、今の時代ってそういう人間って認められないだろ？

それを分かっていながらも勇気を出して告白してきたあいつを拒んだから、居心地が悪くなってって言うかここにいられなくなって転校したんじゃないかと」
「…」
「…なにちょっと残念そうな顔してんだお前」
「ふぇっ！？いやいやいや、ソンナコトナイデスヨ！？」
「…まぁいいや。ほれ、帰るぞ」
「あ、ちょっと待ってよ！」

不意に踵を返して歩き出す悠一の後を追い、横に並ぶ。そして同時にくしゃみを一発。

「ほれ見ろ言わんこっちゃない」
「だ、大丈夫大丈夫、くしゃみの一発くらいなんともないから！」

優姫は笑ってそう言い、鞄からティッシュを取り出して鼻をかむ。その様子を見て悠一は放課後三度目のため息をつき、上着を脱いで優姫の肩に掛ける。

「え？あ…」
「勝手に待ってたのはお前だけど、俺が待たせたって言うのも事実だからな。それになんか暑かったし、ないよりマシだろ？それともいらないか？」
「そ、そんな事ないよ！凄く暖(あった)かい…ありがと」
「ったく…」

夕焼けに染まった道路には、寄り添う二つの長い影が出来ていた。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

夜。正確に言うと午後１１時４３分。

『ご、ゴメンね、こんな時間に』

「別に。もうお前の奇想天外な行動にも慣れてきた」

『ひ、人を珍獣みたいに言わないでよぉ！』

ベッドで良い感じに夢の世界へ旅立とうとしていた悠一を一気に現実の世界に引き戻したのは、優姫からの夜中の電話だった。

「十分珍獣だろうが…。で、わざわざこんな時間に電話してきて何の用だ？」

『あのさ、今週の日曜日って暇？』

「日曜？ん～…多分。確認しないとちゃんとした事はいえないけど」

『そっか。もし暇ならさ、隣町に遊びに行かない？』

「べつにいいけど、何かやりたい事でもあんのか？」

『うん。こないださ、モンハンの新作の発売日だったでしょ？』

「あぁ、そういえばそうだったな」

『そう。それでこないだこの町の一番大きい電気屋さんに行ったんだけど売ってなくて…。だから隣町の大きい電気屋さんに探しに行こうと思ったんだけど、どうせ行くなら色々遊びたいよね～って』

「なるほど。ま、暇ならな」

『やたっ！』

「まだ決まってないけどな。っていうかそろそろ…」

『あ、ゴメンね！おやすみ！』

「はいよ、おやすみ」

「ピッ」と小気味の良い音がして、ディスプレイの光が消える。

悠一は携帯をたたんで机の上に放り投げ、布団に包まり目を閉じた。

## 第０５話　雅樹こと「田中太郎」（後書き）

ちなみにタイトルは間違いではありません。雅樹こと「田中太郎」です、間違っても田中太郎こと「雅樹」と読まないでくださいｗ

**第０６話　「ゴメン待った？」「ううん、私も今来たところだから♪」的なあれ**

頑張って連続投稿です。ペースを戻すためにすこし無理をしてでも投稿していけたらなぁ、という次第でございます。
スピード重視という事であまりきちんと見直しをしていませんので、誤字・脱字などありましたらご報告いただけると非常にありがたいです。

## 第０６話　「ゴメン待った？」「ううん、私も今来たところだから♪」的なあれ

悠一が職員室に呼び出された翌日。

「おはよ、相良君」
「ん。体調問題ないか？」
「大丈夫大丈夫、ちょっと喉が痛いくらい」
「それ大丈夫じゃないんじゃ…」
「相良君だって時々あるでしょ、風邪って感じじゃなくても喉が痛い時。それと同じだから心配いらないよ」
「…まぁ本人が言ってんだからそれで良いか。でも何かおかしかったらちゃんと休むように」
「は～い」

いつもの場所で合流した二人はそんな会話を交わしつつ、瑞樹の家に向かう。

「日曜日って瑞樹の奴も行くんだろ？」
「うん、誘うつもりだよ。本人がなんていうかまだわかんないけど。…ちょっと残念だったりする？」
「別に」
「…はっきり言われるとそれはそれでなかなか堪えるね…。で、そんな事聞いてくるって事は相良君行けるの？」
「予定は特になかった」
「そっか、じゃあ待ち合わせどうする？」
「場所はいつもんとこで良いだろ。あとは時間」
「１０時くらいでどう？」
「了解」

その後持ち物などの確認をしているうちに、天倉宅に到着。
家から出た瑞樹が二人に加わったところで、優姫が日曜日の外出の件を切り出す。

「日曜日って…あたしこの前、先週と今週と来週の週末はどこにもいけないって言ったじゃない」
「…え、そうだっけ？」
「絶対言った、あんたすっごい悲しそうな顔してたの覚えてる」
「あ、あれ…？」
「まぁ確かにあんたに何かを覚えてろって言うほうが無理な話か・・・」
「…それ良い感じに傷つくよ？傷ついてるんだよ、分かってる？」
「あ～はいはい分かってる分かってる。で、どうするの？」
「何が？」
「いやだから日曜日。あんたら二人で行ってくるの？それとも日を改めて皆で行くの？」

優姫はそれを聞いて「あっ」という顔をして、一度俯き、悠一をチラリと一瞥して俯き、瑞樹を見てまた俯き、また悠一を見て…というのを繰り返す。
そんな様子が1分ほど続いたところで、痺れを切らした悠一が呆れたような声で、「バカなんだから無駄な事色々考えるな」と言い放った。

「…またバカって…」
「いらん心配しなくても、俺も瑞樹もお前がどうしようと気にしない。合わせるなら行くし、合わせないなら行かない。お前がすぐに行きたいか行きたくないか、自分で選べ」
「…ゴメンね、ミズキちゃん。あたしモンハンやりたい…だから、さ…」

「そんなに葛藤されてもこっちが困るわ。あたしは良いから行ってきなって。ただし買ったらあたしにも貸す事」
「うん、ありがと！相良君もね」
「相変わらず朝から喜怒哀楽激しい奴だな…分かってたけど」

朝からテンションが最高潮に達しつつある優姫に対し、悠一は朝っぱらから一つ大きなため息をついた。

こうして日曜日の午前１０時、柚原優姫と相良悠一が隣町へ行く事が決定した。

◆◇◆◇◆◇◆

そして、金曜日に不意打ち小テストというボスが出現したものの何とか攻略して迎えた日曜日の午前９時４９分、相良悠一は約束の場所へ向かっていた。
―ちょいと早すぎたか？意外に準備が時間かからなかったからな～…。

「ま、あいつの事だからどうせもう待ってるだろ。下手したら３０分前くらいから…ってあれ？」

悠一は首をかしげて、辺りを見回す。目的の人物が見当たらない事を確認してから、「珍しい事もあるもんだ」とポツリと呟く。
約束の場所に柚原優姫の姿はなかった。まだ待ち合わせ時間の１０分前なのだからいなくてもなんら問題はないのだが、それが優姫となると話は別だった。

「寝坊…なワケ無いよな、あいつに限って」

と呟きつつすぐそこにあるはずの優姫の家にチラリと視線をやると、

「お」

「準備よしっと。…って、あああぁぁぁ！？」

ちょうど家から出てきた優姫と悠一の目が合い、その直後に優姫が大きな悲鳴を上げた。

「相っ変わらず朝から騒がしい奴だな、近所迷惑も考えろバカヤロー」

「そんな事より何で！？何で相良君もういるわけ！？確かに今日はいつもよりちょっと出るの遅かったけどまだ１０分前だよ何でいるのしかもいつも学校に行く時とかは約束の時間から5分くらいは遅れてくるのにどうして今日に限ってこんなに早いのうわどうしよう計画全部パーだせっかく落とし穴仕掛けたりとか『ゴメン待った？』『ううん、私も今来たところだから♪』的なあれとかやってみたかったのにって言うかまず何より――――」

「確かに…」辺りからここまでを息継ぎ無しで叩きつけるようにまくし立てここで一旦息を吸い、

「何で今日に限って約束の時間の前にいるのよ！」

悠一の鼻先に「ビシィッ」となりそうなほどに鋭い動作で指を突きつけ、大声で怒鳴った。

「…すげー肺活量だなお前」

「そんな事は聞いてない！」

「落ち着け…って言うかなんだ落とし穴って、ここ地面コンクリートだぞ？」

「人間何事も成せば成るんだよ！」
「それシチュエーションがシチュエーションなら超カッコイイ台詞なのに…。しかも何だよ「ゴメン待った？」「ううん私も今来たところだから♪」的なあれって」
「男女の待ち合わせの常識、もとい鉄の掟でしょ！」
「そんな掟は知らん。大体それお前が「ゴメン待った？」を言えば成立するんじゃないか？」
「…ゴメン待った？」
「1時間ほど」
「ホンキで怒るよ！？」

そう訴える優姫の目には涙がたまっている…ように見えないこともない。

「…ごめんなさい、ちゃんとやります」
「うん…。ゴメン、待った？」
「ううん、私も今来たところだから♪」
「キモッ！」
「お前がやれっつったんだろ！？」
「まさか口調までそっくりそのままやるとは思わなかったよ…あ、ダメ鳥肌が…。はっ、まさかこれも待たせた仕返しの一部！？こうなる事計算済み！？な、何て悪質なイジメ…」
「てめぇもう黙れ！」

日曜の朝10時とは思えないほどの喧騒から、二人の一日は始まった。

◆◇◆◇◆◇◆

電車に揺られて30分、さらに徒歩で5分。二人は巨大な建物の中

に立っていた。
「分かってはいたけど、でっかいね～…」
「だから来たんだろ？ほれ、さっさと目当てのもん探しに行くぞ？」
「あ、待ってよ！」
現在二人は隣町の巨大な電気製品店に来ている。目的は数日前に言っていた通り、先日発売になったモンスターハンター（通称モンハン）の新作。
と言うわけで早速ゲームコーナーに移動した二人は、ずらりと並んでいる棚を散策し始める。
「あったか？」
「ない～」
「…これは嫌な予感が」
「そういうこと言わない！」
一通り探し終えたあと、ないことを確認した二人は店員に直接確認することにした。
「新しいモンハンってありませんか？」
「あ～、今在庫切らしてて…申し訳ありません」
返事は実にあっさりとしたものだった。
「せっかくここまで来たのに～…」
「しょうがないだろ、超期待作だったし。1週間もすれば手に入るって」
「そんなに待てないよ～！」
「ワガママ言うな。そんなにゲームしたいならゲーセンでも行くか

？」
「…行く」
「素直でよろしい」
と言うわけでたまたま近くにあったゲームセンターに、二人は肩を並べて入っていった。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

「あ、アイツ…。間違いない、あいつだ。なんでこんなところに…」
物陰から悠一を観察している男は、次第に口元をゆがめ、醜く笑った。
「チャンスだ…こんなに早く復讐の機会が訪れるなんて…」
男はポケットから携帯を取り出し、何者かに電話を掛け始めた。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

「最後に太鼓やろ～！」
「あいよ。そ～いえば俺ＤＳのしかやった事ね～な…」
「お、これは勝機あり！？」
「さぁな～」

ゲームセンターに入ってから2時間。色々なゲームで競ったり、あるいは協力したりしながら二人はそれなりに今の時間を満喫していた。
そしてそろそろ他のところに行こうかという雰囲気になったので、最後に太鼓の達人でもやろうかという話になったその時。

「久しぶりだな、相良」

男の声が背後から聞こえた。が、

「あ、ゴメンあたし小銭足りない…」
「ったくこのバカ、先に確認しとけよ…」
「またバカって言われた…ゴメンね、今両替してくる」
「いいよ、小銭くらいならやるから」
「ホント！？さすが相良君太っ腹！」

悠一と優姫の二人は男の存在に気づいた様子もなくゲーム機の前でグダグダなやり取りをしていた。

「久しぶりだな、相良！」

少し眉を引くつかせながらも、めげずに今度は少し大きな声を張り上げる。

「ん？」
「え？」

今度は二人とも男の存在に気づき、振り返る。が、それだけ。

「…」
「…」
「…」

長く気まずい沈黙が数秒続いた後、悠一が目を見開き、

「…あ、田中太郎！」
「え、あホントだ太郎君！久しぶり～元気してた！？」
「誰だ太郎って！？」

思いがけない名前が二人の口から出てきた事に動揺して、思わずツッコんでしまう田中太郎。

「…じゃない！真崎雅樹（まさきまさき）だ！」
「何だっけそれ？民謡？」
「それマイムマイムな」
「あれ、あぁホントだ間違えちゃった。え、でもじゃあマサキマサキって何？」
「モンハンの新アイテムかなんかじゃね？」
「お前らバカにしてるのか！？俺の名前だ！」

痺れを切らして雅樹が声を荒げた。それと同時に、周りのゲーム機の陰からバットやらゴルフクラブやらを持った柄の悪い男が十数人ほどヌッと現れる。

「ひっ！？」

優姫が怯えて飛び退く。一方の悠一は表情を変えていない。しかしその目は確実に人間を見るそれではなく、何か汚いごみか何かを見ているような目だった。

「…表出ろ、相良」
「嫌だと言ったら？」
「ここでやる。俺達にとってはゲーセン内での暴力事件くらいたいしたことないし、そうなったらお前も何らかの問題に巻き込まれるからな」

「…ま、いいけどさ。優姫、行こうぜ」
「だ、ダメだよ！逃げきゃ！何で太郎君がこんな事してるのかは分からないけど逃げなきゃダメ！」
こんな状況でも雅樹の事を太郎という優姫を心の中で笑いながら、悠一は優姫に優しく言う。
「大丈夫、心配すんなって。やるのは路地裏だからバレないしな」
「悠一君！」
「じゃあここで待ってるか？」
「え…」
優姫は辺りを見回す。そこにいるのは凶器を持った柄の悪い男が大勢。大して自分は、丸腰の、運動神経皆無の女子高校生。
「…ついてく」
考えるまでもなく、口が動いていた。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

場所は変わって、路地裏。
道路側に不良軍団（雅樹など）が、壁によって行き止まりになっている側に悠一と優姫が、向かい合うように立っている。
通路の幅は約５メートルとそれなりの広さがある。
「随分出世したんだな。どうよ、サル山の大将になった気分は」
「最高だよ、こうしてお前に仕返しできるんだからな。こいつらには今すぐにでも感謝の言葉を伝えたいくらいだが、まずはお前を殺してからだ」

「今言って良いぞ、ついでに骨の一本か二本くらいは覚悟しておくように言っといてくれ」

その言葉に不良達が笑う。可笑しくて笑うというより、バカにしたくて笑っているような感じだ。雅樹も一通り笑うと、醜い笑みを浮かべて、「…どこまでも減らず口が」と苛立ったように呟いた。

「ゆ、悠一君、挑発しちゃダメ…！」

背後で優姫が震えた声で悠一に言う。

「だから心配すんなって。こんなのに負けたりしないから。それより結構ショッキングな事になると思うからあんま見ないほうが良いぞ」

「隙あり！」

悠一がヘラヘラと笑顔で優姫に話しかけている隙に、一番近くにいたバットを持った男が悠一に襲い掛かる。

「危ない！」

優姫が悲痛な声を上げたのと同時に悠一は振り返り、男のバットを紙一重でかわし、空振ったことによってバランスを崩した男のジャケットを掴み強引に地面に叩きつける。

「ぐぇっ！」

さらに悠一は無表情横たわった男の左手を、足の甲でグリグリと踏み潰す。

「いで、いだだだだ！ま、まいった、助け、折れ…！」
「だから言っただろ、『骨の一本か二本は覚悟しとけ』って」
男が許しを乞うのも聞き入れず、足を踏み潰し続ける。一切の手加減をしていないのか、既に靴の周辺は真赤に染まっており、手は変な方向に曲がっている。
「痛い、助け…！」
「そ～か痛いか、じゃあ寝てろ」
ようやく手から足を離したかと思うと、今度はそのまま足を振り上げ男のコメカミに叩きおろす。男は悲鳴も上げずにその場で沈黙した。
◆◇◆◇◆◇◆
あたりが静寂に包まれた。不良たちも、雅樹も…優姫さえもが、悠一の行動に言葉を失っている。
「どした？ビビったのか？」
沈黙を破ったのは、嘲笑を浮かべるこの沈黙を招いた張本人だった。

## 第０６話　「ゴメン待った？」「ううん、私も今来たところだから♪」的なあれ

物凄く今更な気がするんですが、一応未来の話ですが基本は今と同じと言う認識でお願いします。未来という設定は話が進むにつれ活用していきたいと思います。

それから、評価、感想、ご意見等ありましたら気軽にどうぞ、と言うかむしろ是非お願いします。ちなみに頂いた評価などには気づき次第返信するように心がけております。

## 第０７話　友達（前書き）

期末テストの勉強とかあるのでかなり状況描写がいい加減です、すみません。その代わり比較的簡単に思いつく会話は結構多いので、ご容赦いただければ幸いです＾＾

# 第07話　友達

「…ちっ」

舌打ちをする悠一の足元には、横たわっている男達。そして背後の少し離れた場所で地面にへたり込んでいる優姫。

「十人以上いてこのザマか…。ま、もともと何も期待なんてしてなかったから構わんけどな」

沈黙している男達にそう吐き捨て、悠一は振り向き優姫に笑いかけた。

「怪我ないか？」

「…」

「あ～…やっぱ刺激強すぎたか？」

「…ゆ、相良君？」

優姫の表情からは感情は読み取る事はできなかったが、声は震えていた。

「…それともあれか、やっぱ俺が怖いとか？」

「なっ…」

「まぁそうだよな、顔色一つ変えないで相手のことをここまでボコボコに出来るやつなんてそうそういないか…。悪かったな、怖がら――」

「何やってるの、相良君のバカー！」

「…はい？」

黙っている優姫の言葉を代弁しているつもりで喋っていた悠一は、その「予想の斜め上」とかそういうレベルでは表現できないほど想像からかけ離れた怒声を聞いて、あっけに取られて思わず聞き返してしまった。

「確かにいきなりバット持って仲間連れてケンカ売ってきた太郎君も悪いよ、でもそれ以上にそれを話し合いもなしに暴力で解決した相良君が悪い！」

「は…いや、えっと…は？」

「だから！太郎君がいくら自分の恋が実らないからって相良君に酷い事しようとしたのは確かに相手が悪い！でも、それをどうにか平和的に解決できないかを考えなかった相良君が一番悪いって言ってるの！」

「…」

唖然とするしかなった。悠一にとって、今この状況で優姫が取る行動は「感謝する」と「自分を恐れる」の二択だった。それをまさか助けた事を咎められるとは予想だにしていなかったのである。一通り優姫の言い分を聞いたあと、悠一は必死に状況を整理し、ようやく会話が出来る程度には頭が落ち着いた。

「…つまりあれか、こいつらは俺が告白を断ったからその腹いせに暴力を振るいに来てて、それの打開策を探し出そうとしなかった俺が基本的に悪いと、そういうことか？」

「そう！」

「ついでにあそこに寝てるちっこいのが田中太郎？」

「そう！」

「…真崎雅樹じゃなくて？」

「…なにそれ、民謡？あ、それマイムマイムだから…モンハンの新アイテム？」

「…」

悠一は結論を下した。

「バカじゃねーのかお前！？」

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

「…あの時雅樹君と教室出て行った時にそんなことがあったんだ…」

「そういうこと。納得したか？」

その後、近くにあったベンチに二人並んですわり、悠一は優姫に事の顛末を話した。雅樹が脅しをかけてきたこと、それを悠一が脅し返したこと、それが雅樹の転校の理由だと言う事、今日来ていたのはその復讐のためだということ、そして最後に雅樹の名前が田中太郎ではないこと、それらを全て包み隠さず話した。

「納得できない事が一つ…いや二つある」

「何だよ？」

「一つは、結局ここより前にも雅樹君に暴力を振ったことがあること。どうしてそういう事するの？」

「だから言っただろ、あいつから殴ってきたんだ。正当防衛だ」

「素直に成績わざと落とせばよかったじゃない」

「何で俺があんな奴のために手を抜かなきゃなんないんだよ」

「ケンカにならないのが最優先でしょ？」

「そこは納得できないな、ケンカを回避するために自分が折れる必要はない」

「…やっぱり納得できないけど、とりあえず今はもう一つの事」

「どーぞ」

「どうしてあたし達に黙ってたの？」

「教える必要がなかったから」
「私達は相良君に聞いたよ？『何だったの？』って。それなのにどうして嘘をついてまで隠してたの？」
「話さなきゃいけない理由がなかったからだ」
「嘘をついてまで隠す理由もなかったはずだよ」
「…」
「…」

気まずい沈黙が訪れる。悠一は隣に座る少女の事をチラリと見て、一つため息をついた。

「…何そのため息？」
「…別に」

とは言うものの、悠一は正直なところかなり困惑していた。
今まで一緒に過ごしていた中でも（というのもまだ一ヶ月も経っていないのだが）、本気で怒った優姫というものは見たことが無かった。
瑞樹とケンカをしてしまった時も朝の待ち合わせの時間に遅れてしまった時も、あまり迫力のない声で注意をする程度だった。
それが今はどうだろうか。さっきは自分達を襲った不良を返り討ちにしたことを本気で怒鳴られ、さらには余計な心配はさせまいと黙っていた出来事を信じられないほどのプレッシャーで咎めてくる。
もちろん事実のままに「心配させたくなかった」と言えばこの問題は解決するのだが、それは後日瑞樹にからかわれるというリスクを供えているゆえに最終手段なのであった。

「…相良君」
「え？」

そんなくだらない意地を張っている中、不意に優姫が悠一を呼んだ。

「私はさ、相良君は友達だと思ってる。だから相良君の事は信頼してるし、相良君の意見に納得できなくたって一緒にいるし、よっぽどの事じゃない限り隠し事はしないし嘘もつかない」

「…光栄だね」

「…相良君はさ、私のことどう思ってるの？友達？ただの頭の悪いクラスメイト？それとも自分の休日の予定を勝手なワガママでメチャクチャにする迷惑な女？」

「…頭の悪いクラスメイトだな」

「…そっか」

「そ。おまけに運動神経はないし恥じらいもない、その上さらにお節介で、まだ寒いこの時期の夕方にいつ来るかも分からない奴を自分が風邪ひきそうになるまで待ってるバカだ」

「…そうだね」

「そんでもって…」

「まだあるの？」

「…そんでもって、友達だな」

「…ぇ？」

今まで自分の膝の上で組んだ手を見つめながら話していた優姫は、悠一のその言葉を聞いてパッと顔を上げた。それは今自分の聞いたことが信じられないという顔だった。目尻が少し濡れているように見えたのは気のせいではないはずだ。

「…今、友達って…」

「…悪かったよ、黙ってて。余計な心配掛けたくなかったし、別にお前には何の関係もない話だったしな」

「…何の関係も無くないよ、友達でしょ？」

「そうだな、悪かった」

「…えへへ」
「…泣くか笑うかどっちかにしろよ」
「な、泣いてない！泣いてないよ！？」
「ほっぺに涙の跡が」
「嘘っ！？そんなに泣いてないよ！？」
「嘘だ」
「悠一君！今嘘つかないって言ったばっかりじゃん！」
「わかった、嘘じゃなくて冗談だ」
「そういう問題じゃな～い！」

日曜日の賑やかな町に、一つの怒声が木霊（こだま）した。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

「あ、あそこにマックあるよ」
「お、じゃああそこでパパッと食ってくか」
「あたしお腹空いたよ～」
「結局あのあと昼飯食いそびれたし、なんだかんだでもう４時だしな。これ食ったら帰るぞ」
「え～、もう？何かあんまり遊んだ気がしないよ～…」
「予想外の事が起こったからな。でも十分遊んだろ、ゲーセン行ったりウィンドショッピングしたり」
「そうだけどさ～…」
「文句言うな、ほれ早く行くぞ」
「あ、待ってよ！レディーズファーストって知らないの！？」
「…レディー？」
「…あ、どうしようその哀れんだような目すっごいムカツク。言いたいことがあるならハッキリ言って？」
「…自分でレディーとか言う前にその起伏に乏しい体を何とか…」
「死んで！ミズキちゃんじゃないけど悠一君死んで！」

「ハッキリ言えって言ったじゃねぇか！？」
「全然ハッキリ言ってないじゃん！？『起伏に乏しい』とかちょっと気を遣ったようなその言い方がムカつく～！」
「じゃあハッキリ『胸とか背とか成長してから言え』とか言ったら怒らなかったのかよ！？」
「ハッキリ言うなぁ～！」
「理不尽だ！」
「うるさいうるさい！言うほうが悪いんだ！」
「言えって言ったのはお前だ！」

そんな無限ループのようなやり取りをしつつ、二人はマックに入ってそれぞれの注文をする。

「ったく、な～んでそこまでフレンドリーに接せるかね…」
「どーゆうことよ？」
「今までの比較的仲良いと思ってた奴らはケンカに巻き込まれたりした途端に離れてったからな。っていうか普通そうじゃねぇか？あんだけ容赦なく人をボコれる奴なんかそうそういねぇぞ、自分で言うのもなんだけど。お前俺が怖かったりしないのか？」
「別に怖くないよ、さっきの悠一君と今の悠一君なんか違うから」
「…は？」
「自分でもよく分かんないけど、とにかく違うんだよ。何なのかな～、雰囲気が違うっていうか。今の悠一君はすごく優しそうな感じなんだけど、さっきまではすごく怖かった。なんか別人みたいだったよ？」
「…電波受信中？」
「…ゴメン『優しそうな感じ』って言うの撤回させて」
「いや、だって意味わかんないし」
「まぁしょうがないか、あたし自分でもあんま分かってないし。でも悠一君は私にひどい事しないでしょ？」

「何でそう思う？」
「友達なんでしょ？」
「…そうだな」
「ふふん♪」
「勝ち誇ったような顔すんな鬱陶しい！」

◆◇◆◇◆◇◆

「ん～、楽しかった～！」
「楽しかったか…？」

現在時刻は5時半。悠一と優姫の二人は駅のホームで帰りの電車を待っている。

「楽しかったよ？色々トラブルはあったけど」
「目的のもんは無かったけどな」
「それを言わないでよぉ…」

そこで帰りの電車がホームに到着した。二人はそれに乗り、空いていた席に並んで座る。

「…ふぁ…ぁ」
「…寝るなよ？」
「ね、寝ないよ！？」
「…」

～五分後～

「すぅ…すぅ…」
「…嘘はつかないんじゃなかったっけか？」
「…くぅ…」
「…聞こえてるワケ無いか」

優姫は静かに寝息を立てて、悠一の肩に体重を預けている。

「…友達、か。そんな事ちゃんと確認されたの初めてだ…」

小さな声で呟く。

「…ありがと、な」
「…ふふっ、どういたしまして♪」

悠一は目を見開いて肩にある小さな顔を見る。そこには寝顔の代わりに優しい微笑みがあった。

「…狸寝入りかよ」
「何か面白い事が聞けそうな気がして」
「…前言撤回だコノヤロー」
「あたしが一字一句覚えてるから大丈夫♪」
「忘れろ、記憶喪失になれ」
「ふふ～ん、さっきの仕返しだよ」
「…まな板のくせに」
「負け惜しみにしか聞こえないね」
「…ちっ」

結局その後二人揃って寝てしまい、駅をだいぶ乗り過ごしてしまったのは二人だけの秘密だったりする。

## 第０７話　友達（後書き）

前書きにも書きましたが、今週が期末テストなので更新は多分次の来週になると思いますが、もし余裕があったら少し短めの話を更新するかもしれません。

## 第０８話　最低最悪のボーイ・ミーツ・ガール（前書き）

随分遅れてしまいましたが、投稿できました。そして皆様、メリークリスマス！
物語のターニングポイント、お楽しみください！

## 第08話　最低最悪のボーイ・ミーツ・ガール

「あ、悠一君、おはよ～」
「…眠い」
「こ～ら、挨拶はしなきゃだめだよ」
「…グッモーニン」
「…まぁよし、行こ？」
「ん」

月曜日午前7時、いつもの場所で悠一と優姫は合流した。

「いや～、昨日はビックリしたね！」
「『ビックリしたね！』じゃねーよ、お前が寝たから乗り過ごしたんじゃねぇか…」
「人のせいにしないでよ、自分だって寝てたんだからさ～」
「先に寝たのはお前だろ？」
「釣られた悠一君が悪いんだよ」
「開き直りやがって…」

昨日の話題で盛り上がりながら歩く二人が向かう先は瑞樹の家。

「ミズキちゃん、おはよ！」
「おはよ、相変わらず仲睦まじいようで」
「いやぁ～、それほどでも～♪で、ナカムツマジイって何？」
「…そんなオチだろうと思った。で、モンハンは買えたの？」
「う゛…」
「買えなかったみたいね」
「しょ、しょうがないじゃん、そのお店で売り切れてたんだから！」
「誰も責めてないでしょうが…。でも何件か回ったらあったんじゃ

ないの？」
「私だってそうしようとしたけどさ～、悠一君がマイムマイム君にケンカ売られちゃったんだもん…」
「…マイムマイム君？何それ民謡？」
「あれ、違った？悠一君なんだっけ？」
「真崎雅樹な」
「え、そんな名前だったっけ？」
「…またの名を田中太郎」
「あぁ、そうだそうだ、田中太郎君！太郎君に絡まれて、それを悠一君が返り討ちにしたんだよ！」
「田中太郎…？あぁ、あのホモね」
「あ、そっかまだミズキちゃん知らないっけ？あのね―――」

そんな感じで瑞樹に昨日の話を聞かせつつ歩き、やがて三人は学校に到着した。

「ふぁ…ぁ…」

悠一が上履きに履き替えながら、大きな欠伸をした。

「悠一君なんか今日凄い眠そうだね？そういえば朝も眠いって言ってたっけ」
「どうせ夜更かしでもしてたんでしょ？」
「正解、知り合いと夜遅くまで話しててな…。ちょい寝不足」
「ふ～ん…何か悠一君が誰かと長電話なんてイマイチ想像できないね」
「そうか？まぁ俺もたまにしかやんないけどな」
「そうなんだ。あ、あたしにも携帯番号教えてよ。遊ぶ時連絡取りやすいし」

その時、授業開始1分前の鐘が鳴った。
「っと、時間ないから放課後な。お先っ！」
「あ、ちょっと！…もう、少しくらい待ってくれても良いのに。ねぇ、ミズキちゃ…あれ？」
同意を求めて瑞樹を探すが、彼女の姿は既になかった。
「優姫、早くしないと遅刻よ！」
声の方向を見ると、既に１００メートルほど離れた瑞樹が叫んでいた。
「ちょ、二人そろって置いてかないでよ～！」
自分も急いで靴を下駄箱にしまい、教室に向かって駆け出した。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

放課後。

「優姫、悠一、今日この後ヒマ？」
「俺はヒマだな」
「あたしも」
「じゃあこのあと遊びに行くわよ。とりあえずゲーセンとか」
「おぉ、いいね～あたしは行く！」
「…俺正直昨日行ったからゲーセンはお腹一杯なんだが」
「そんな都合知らないわよ、あたし抜きで勝手に昨日行ったあんた達が悪いの」
「ついでに財布のほうも悲惨な事になってるんですが」

「計画性に欠けた自分の責任ね」
「…分かったよ、行けば良いんだ―――」
そこまで言ったところで「ピロロロロ、ピロロロロ…」と言う何の変哲もない携帯の着信音がどこからともなく響いた。
「あれ、俺だ。悪い、ちょっと待ってろな。もしもし…」
一言断って悠一は電話に出た。
◆◇◆◇◆◇◆
「チャ～ンス。優姫、ちょっと」
「ん、何ミズキちゃん？」
「あんたさぁ、昨日あいつに助けられたじゃない？」
「うん」
「それでアイツに惚れてたりする？」
「惚れ…えええぇぇぇ！？」
「シーッ、声が大きいって！」
「な、ななな、な、なっ！？何で！？」
「だって先週より何となく仲良くなってるっぽいし、いつの間にか『悠一君』とか呼んでるし」
「そ、そそそれはその、昨日友達だって言ってくれたからもうちょっと馴れ馴れしくなっても良いかなって思ったり思わなかったり！」
「…そんなに動揺しなくても良いって」
「ど、動揺なんてしてないよ！？私いつでもこんなテンションじゃん！」
「…う～ん、意識し始め、って所かな？さて、これからどうなるかしら…」

◆◇◆◇◆◇◆

一方その頃。悠一は携帯の向こうの人物と会話をしていた。

「こんな平日からか？ったくめんどくせぇな…確実に今日なのか？根拠は？…ん～、でも俺今から友達と出かける約束があるんだけど…分かった分かった、行けば良いんだろ行けば？」

「惚れ…えええぇぇぇ！？」

「…なんでもない、例の友達が騒いでるだけだ。…はいはい、とりあえず一旦そっち向かうから。…あぁ、了解。そいじゃ」

折りたたみ式の携帯をパチンと閉じる。一つため息。

「珍しく瑞樹の奴から誘ってきたってのに…。何て言われるか分かったもんじゃねぇなこれは」

携帯をポケットに滑りませ、悠一は待っている二人のところへ戻った。

「悪い、急用入った。俺今日はすぐ行かないとだ」

「え、そ、そうなの？」

「…優姫、何かあったか？顔真赤。そういえばさっきも叫んでたっけか、大丈夫か？」

「だだだ大丈夫！問題ないよ！」

「…何かあったのか？」

優姫のおかしな様子の見て、悠一は瑞樹に尋ねる。

「別に何もなかったわよ。それよりさっさと急用とやらに行けば？」

「んな怒んなって、今度なんか奢るから」

「別に怒ってないわよ、奢ってもらいはするけど。さっさと行きなさい」
「悪いな、じゃ行ってくる。柚原、またな！」
「へ！？あ、うん、バイバイ」

何となく元気がなかった優姫に別れの挨拶をして、悠一は教室を出て行った。

「…アイツは相変わらず『柚原』なんだ」

誰にともなく、瑞樹が呟いた。

◆◇◆◇◆◇◆

3時間後。悠一が去ったあと落ち着いた優姫は瑞樹と共にゲームセンターへ繰り出し、現在は町を歩いていた。

「それにしても、相変わらずあんたゲーム下手ね」
「うぅ…」
「勉強できない、運動もダメだしゲームも下手。あんた取り得ある？」
「…美少女」
「自分で言うな」

対戦ゲームで惨敗、リズムゲームではなかなか良い成績を叩き出したもの瑞樹には一歩及ばずという記録を残した優姫はそれなりに落ち込んでいた。

「…でも昨日悠一君には勝てたよ？」
「じゃあ悠一相当下手なんじゃない？」

「そんな事ないよ、多分あたしと同じくらい」
「十分下手よ」
「うぅ～、ミズキちゃんのイジワルイジワル！！」
「Sだからね♪」
「音符をつけるようなことじゃないよ～！」

ガシャン！バリィン！
「キャアアアァァァ！！」

二人がじゃれあっていると、近くの宝石店のガラスが盛大な音と共に割れ、数人の人物が店内に乗り込んでいった。
チラッとしか見えなかったが、それぞれが覆面と銃器を装備しているようだった。
二人はしばしその非日常的な光景に呆然としていたが、やがて我を取り戻し、今自分達の前で宝石強盗が発生している事を脳が認識した。

「マズイって…！優姫、逃げるわよ！出来るだけ遠くに全速力で！」
「…だ、ダメッ！」

掴まれた手を、優姫は振り払った。

「優姫！？何考えてるの、死にたいの！？」
「あ、あの人たち銃持ってた…」
「そうよ、だから早く逃げるの！」
「だ、ダメ…誰かが止めないと、人が死んじゃう…！」

「それは警察の仕事でしょ！？今逃げないと死ぬのはあたし達よ！ほら早く！」
「…ミズキちゃん…ゴメンね！」
瑞樹の説得を聞き入れず、優姫は宝石店の方へ向かって走り出した。
「…っ！嘘でしょ、ったく！」
携帯を取り出して１１０番を押しつつ、走り出した親友を追って瑞樹も同じく走り出す。

◆　◇　◆　◇　◆　◇　◆

「おら、お前ら早く荷物つめろ！」
「分かってるって、もうすぐ終わる！」
宝石店の中では覆面をした人物が４人、懸命に宝石を袋の中に詰めていた。
「ま、待って！」
「あぁ？」
４人がそろって声の方向を見る。視線の先には小柄の女子高生が一人。体を震えさせて立っていた。
「はぁ、はぁ…ほ、宝石が欲しいなら、持ってって良いから！だから銃は、使わないで！誰も、傷付けないでっ！」
女子高生、柚原優姫は震える体を押さえつけ、懸命に宝石強盗の４人に訴えかけた。

４人はそれを聞いて、顔を見合わせ…

「…ぷっ！」

『あっははははは！』

…盛大に笑い出した。

「なんだお前、要するに人殺しするなってことか？」

「そ、そう！誰も傷付けないで…お願い！」

「ん～、困ったなぁ、俺達もうみ～んな殺っちゃったしな～」

「…ぇ」

それを聞いて、優姫は慌てて店内を見回す。

強盗の４人以外の人間は店内におらず、壁の至る所に銃痕と血がついている。

「…ぁ…ぁぁ！」

辺りの悲惨な状況を見て、優姫の目から涙がこぼれる。その様子を見て、強盗４人が再び笑い出した。

「気づいてなかったってか！相当テンパってたんだな、傑作だ！はっはっは！」

「そういうわけなんで、お前邪魔だ」

リーダー風の男がいち早く笑いをおさめ、手にしている銃器の銃口を優姫に向ける。

「消えとけ」
バリィン！

男が人差し指に力を込めた刹那、またしてもけたたましい音と共に店のガラスが大破する。

「！？な、なんだ！？」
「まさかもうサツか！？」
「そんなバカな、対応がいくらなんでも早すぎる！」

予想外の出来事に強盗全員がうろたえた。

◆◇◆◇◆◇◆

優姫は未だに俯いて涙を流していた。

「強盗罪、銃刀法違反、殺人罪、その他諸々（もろもろ）の理由で逮捕、もとい処刑する。おとなしくするように～」

顔を上げた。聞き覚えのある声がしたような気がした。

「な、なんだてめぇ！？」
「いやぁ、何だと言われても…。お前らを制圧するために軍に送られた兵器ってとこかね」

涙の溢れる目で、声がした方を見る。

「て、てめぇはいったい何者なんだぁ！？」

「名乗る名前なんて無いさ」

そこに映ったのは、

「何の変哲もない、」

右手にガトリングガン、左手に刀を装備した、

「ただの兵器さ」

友達の、相良悠一だった。

## 第０８話　最低最悪のボーイ・ミーツ・ガール（後書き）

新年だったり色々あって遅れる可能盛大ですが、気長に待っていていただければ幸いです。自分勝手を言って申し訳ありません…；；

## 第０９話　「さようなら」（前書き）

大変遅くなりました、最新話です！
成績がえらいことになってしまいまして、何とか修正するために１月全部使ってしまいました…。
でも何とか回復したので、これから少しずつコツコツと投稿していけたらなと思います＾＾

## 第０９話　「さようなら」

長めの黒髪、整った顔立ち。スラリと背が高いが細いというイメージは湧かない。キリリとしまった口と少々吊り気味の目のその人物、

「悠一…君…？」

———相良悠一は、この場におおよそ似つかないすました表情で立っていた。

数秒間時間が止まった後、強盗の中で一番リーダー的な雰囲気を纏った人物がいち早くその異様な光景から立ち直った。

「な、なんなん…！」

男が言い終える前に、悠一が右手に持ったガトリングガンを発砲した。轟音と共に飛来する銃弾の嵐を体中に受けて男は吹き飛び、そのまま地面に崩れ落ちた。

「お、お前、いったい…！」

それを見て残りの三人が正気に戻ったと思いきや、彼らの体にも銃弾が着弾する。全員先ほどの男と同じように血飛沫（ちしぶき）を上げながら、声を上げる間も無く絶命した。

「…さっき言ったろ、『何の変哲もないただの兵器』って」

悠一が四つの亡骸に静かにそう告げた途端、数人の完全武装した人間、おそらく軍人が店内に上がりこんだ。

「状況は？…なんて聞くまでもないか」

「ん。目標の殲滅は終了。と言うわけでこれ頼んだ。ったくあの野郎、だから刀はいらないって言ったのに無理矢理持たせやがって…」

悠一は話しかけてきた隊長らしき人物に持っていた銃と刀を押し付けた。

「分かった、あとで俺が返しておく。残りの後片付けとか後始末とかはこっちでやっとくから、お前はもう帰っても良いぞ」

「ど～も。あそうだ、それとアイツな…」

悠一がチラリと、涙を流しながら呆然とへたり込んでいる優姫を見る。

「彼女がどうかしたか？見たところ一般人みたいだが…」

「一般人だよ、学校で仲良くしてる友達だ。と言うわけで、きっちり対応するように。あと多分あとからもう一人ポニテで吊り目の女子も来ると思うからそっちもよろしく」

「注文多いな…まぁ分かった、まかせろ」

「頼んだぜ、そいじゃ後よろしく」

すれ違いざまに男の肩をポンと叩き、悠一は店を出て行った。が、混乱している優姫はそれすら気づかずに呆けていた。

その後、悠一が出て行ったほぼ直後に瑞樹が店に到着。泣いている優姫を慰めつつ先ほど悠一と話していた男と共に外に停めてあった装甲車に乗ってその場を去った。

◆◇◆◇◆◇◆

「…落ち着いたか？」

基地についてから二人が通されたのは小さな部屋だった。人が十人も入れば窮屈そうな部屋に小さな机が一つ。天井から吊るされているライトは部屋全体を薄暗く照らしており、刑事ドラマなどでよく見る尋問室のような雰囲気だった。

部屋に通された途端、優姫は崩れるように置いてあった椅子に座り込み、それを瑞樹が横に立って頭を撫で続けた。それが1時間ほど続いただろうかと言う頃、二人をこの部屋に通した人物が、全ての武装を解除し、遠慮がちに部屋に入ってきた。

「私は大丈夫です。そもそも私はほとんど何が起こったのかを見てませんし」

「そうか。…君は？」

男は瑞樹の返答に安堵したような表情を向け、次に俯いたままの優姫に声をかける。

「…ですか？」

「ん？」

消え入るような声なので聞き逃したのか、男が聞き返す。優姫はもう一度口を開き、

「…悠一君はどこですか？」

真っ直ぐ男の目を見て言い放った。

予想外の返答が帰ってきたことに驚いたのか、男はしばらく呆然と

していた。
…と、思った直後。
「はっはっはっはっ！成程、アイツもなかなか慕われてるじゃないか！ま、君も自分より先に友達の事を心配出来るなら問題ないだろ、結構結構」
大声で笑い出した。小さな部屋での大きな笑い声は壁を反響し音量を上げ、二人の耳に襲い掛かる。
たまらず耳を手で押さえている二人に気づいて、「すまんすまん」と謝りながら男は声量を抑えた。
「…それで、悠一君はどこなんですか？」
「まぁ少し落ち着いて。そんなに焦らんでもアイツはしばらくはこの基地から帰ったりしないから」
「でも確かめなきゃいけないことが…！」
「分かってるって、それに関係してる事で君たちに、特に君に前もって断っておかなきゃいけないことがあるから」
男は優姫の目を見て、先ほどの笑っていた時の目とは違い真剣な目をして、有無を言わさぬ迫力と共に言った。
―だが、
「そんな事はあとで聞きます。今はとにかく、悠一君のところに案内してください」
そんな迫力にまったく物怖じもせず、優姫は男を見据えて言い放った。その迫力は、最早命令と呼んでも良いかもしれない。
そのあまりの迫力に男は、瑞樹すら、しばし呆然と優姫を見つめる。
そしてしばらく後、

「…分かった分かった、分かったからそんなに睨むな。どうせ連れて行かなきゃ話なんか聞いてくれなさそうだし」

男は軽く手を上げ席を立つ。

「…ミズキちゃん、行こ」

優姫もそれに従って立ち上がり、男と共に部屋を出る。それを見てようやく正気に戻ったのか、瑞樹も慌てて立ち二人の後を追った。

◆◇◆◇◆◇◆

「…悠一」

男は鉄製の扉の前に立って、目的の人物の名を呼ぶ。

「柚原だろ？あとついでに瑞樹も。いいぞ、入ってきて」

部屋の主の了承を得て、男は重そうな扉を開けて二人に道を譲る。優姫はそれを確認してから、男には目もくれずに部屋に侵入していく。

部屋には何も無かった。椅子も無い、机も無い。窓も無ければ、電気すらない。それはさながら牢屋のようだった。

そんな中で、

「…悠一君」

「…よ、久しぶり」

相良悠一は、何故かラーメンを片手に地面に座り込んでいた。

「…うん、久しぶり」

悠一の挨拶に返事をして、止まらずに彼に向かって前進する。

「落ち着いたか？」

「…うん、ありがとう」

止まらない。

「そっか。もう大丈夫なら、今日はもう遅いしとっとと帰ったほうが良いな」

「…うん、そうだね」

座っている悠一の前で足を止める。目線が悠一と同じ高さになる位置までしゃがみこむ。

「…お前も食うか？」

「ううん、いらない」

悠一の申し出を一刀両断した直後、部屋に「パァン」と言う音が鳴り響いた。音は壁を反響し、音量を何倍にもして部屋内にいる人物の耳に届ける。

「…」

「…」

乾いた音の後には、陶器の割れる音と箸の落ちる音。それが済むと、部屋は静寂に包まれた。

「…どうしてあんな事したの？」
静寂を破ったその声は、震えていた。
「…あんな事って？」
「どうしてあの人達を殺したりしたの？」
「仕事だからさ」
殴ったほうも殴られたほうも、互いに目を逸らさない。
「…私はこの前、もう人傷付けないでって言ったよね？」
「注意はされたかもな。でも俺は約束はして無いし、守る義理も無い。そもそも、これが仕事なんだから仕方ない」
「…仕事って何なのよ、人殺し？」
「否定はしないさ」
「…っ！」
もう一度乾いた音。
「友達だと…思ってたのに…！」
「…友達ってのはお互いの事を認め合うもんじゃないのか？」
「私の知ってる悠一君は人殺しなんかしない！」
怒声が鳴り響く。いったいこんな小柄な体のどこからこんな声量が出るのかと言うくらい大きな声で怒鳴る。
「…残念でした」
「…！っ…！」
優姫の手が再び振り上げられ…止まる。

表情は見えないが、唇を噛んでいるのだけはうかがえた。
行き所を失った手は力なく彼女の傍らまで落ちてから、強く握り締められる。

「…」
「…」

お互いにかける言葉が見つからないのか、それともかける言葉などそもそも無いのか。部屋は再び静寂に包まれる。
それがどれほど続いたのか、不意に優姫がゆらりと立ち上がった。
悠一に背を向け、コツコツと足音を立てて出口へと歩いていく。
部屋を出る直前。

「…さようなら」

振り返らずに告げた少女の姿は、ゆっくりと悠一の視界から消えうせた。

## 第０９話　「さようなら」（後書き）

新しくコメディー始めました。あんまりシリアスばっかりだと飽きてくるし何より自分の気が滅入ってしまうので、息抜きにちょくちょく更新して行こうと思います。興味のある方は是非＾＾（二次創作ですので、苦手な方はご注意を＜＞）

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1878l/

遅すぎた告白

2011年10月5日18時40分発行